和島村埋蔵文化財調査報告書第11集

奈良崎遺跡 II

—二級河川郷本川広域基幹河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2002

新潟県和島村教育委員会

奈良崎遺跡 II

—二級河川郷本川広域基幹河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2002

新潟県和島村教育委員会

序

和島村はのどかな田園風景が広がる自然豊かな村です。その一方で、国道や農業基盤整備などの大規模工事が進んでおり環境は様変わりしつつあります。それに伴い、埋蔵文化財と呼ばれる遺跡の記録保存を目的とした発掘調査も行われております。

今回の奈良崎遺跡発掘調査は平成12年度に二級河川郷本川改修工事に伴い行われました。その結果、弥生時代から古墳時代を中心に大量の遺物が出土しております。この中には、土器だけでなく木製の農具である鋤など興味深い遺物も含まれていました。また、和島村で数多く出土している奈良・平安時代の遺物も例外なく出土し、中でも器の底に書かれた墨書は注目されます。

これらの成果が考古学研究のみならず、地域における総合的な教育・普及活動の一助につながれば幸いです。

最後になりましたが、本書作成にあたりご理解ご協力を賜りました新潟県与板土木事務所・新潟県教育委員会並びに地元住民の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

和島村教育委員会

教育長　下村　孝一

例　言

1．本報告書は新潟県三島郡和島村大字島崎字奈良崎2148ほかに所在する奈良崎遺跡の発掘調査報告書である。奈良崎遺跡発掘調査は新潟県与板土木事務所所管の二級河川郷本川広域基幹河川改修工事に伴い、新潟県和島村教育委員会が新潟県から受託して平成12年度に実施した。

2．グリッド杭の打設、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量と測量図作成は朝日航洋株式会社に委託した。

3．調査面積は河川改修部分の1,000㎡で２層調査である。

4．発掘調査及び整理作業は平成12～13年度に行われた。体制は以下のとおりである。

（発掘調査・平成12年度）

調査主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
事務局	〃	事務局長	藤井賢計
担当者	〃	主事	丸山一昭

（整理作業・平成13年度）

整理主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
事務局	〃	事務局長	古室　栄
担当者	〃	主事	丸山一昭

（発掘作業参加者）

早川徳一　羽入正敏　横尾謙二　藤井高治　関本昭二郎　早川正稔　小林正次
早川信次　本間ノリ子　本間ハツ　藤井静江　家合正子　栗林チヨ　北島竹乃
北島ケヨノ　小室イツ　早川イエ子　池内ハツイ

（整理作業参加者）

小田富美子　久住幸江　近藤保　関川たづ子　高橋智子　早川雅子　山口八千代

5．本書の記述・編集は丸山一昭が担当した。

6．遺物の注記は「奈」とし、ほかに出土位置・層位・遺構名などを記した。

7．本遺跡の出土資料・記録資料などは和島村教育委員会で一括保管している。

8．発掘調査から本書作成に至るまで下記の諸氏・関係機関にご指導・ご協力頂いた。記して感謝申し上げる。

安立聡　甘粕　健　相田泰臣　伊藤秀和　橋本博文　春日真実
新潟県教育庁文化行政課　新潟県与板土木事務所

本文目次

第1章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置 …… 1
2．地理的環境 …… 1
3．歴史的環境 …… 2

第2章　調査概要

1．調査に至る経緯 …… 6
2．調査・整理の経過 …… 6
3．グリッドの設定 …… 7
4．地形と層序 …… 8

第3章　遺構と遺物

1．検出遺構
(1)　概要 …… 11
(2)　各説 …… 11
2．出土遺物
(1)　概要 …… 13
(2)　弥生・古墳時代の土器 …… 13
(3)　古代の土器 …… 17
(4)　中世の陶器 …… 17
(5)　木製品 …… 17
(6)　石器・石製品 …… 18
(7)　金属製品 …… 18

第4章　まとめ

1．弥生・古墳時代
(1)　器種分類 …… 20
(2)　編年的位置付け …… 23
2．古代・中世以降 …… 28

要約 …… 29
参考文献 …… 29

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 4
第３図　調査範囲とグリッド設定図 … 7
第４図　遺跡周辺の地形 …… 9
第５図　調査区の地形と層序 …… 10
第６図　出土遺物重量分布図 …… 19
第７図　器種分類図(1) …… 21
第８図　器種分類図(2) …… 22
第９図　遺物の出土位置図 …… 25
第10図　遺物の出土範囲 …… 26

表 目 次

第１表　周辺の主要遺跡一覧 …… 5
第２表　遺構観察表 …… 12
第３表　編年対応表 …… 28
遺構観察表
１．弥生・古墳時代の土器 …… 31
２．古代・中世の遺物 …… 36
３．木製品 …… 37
４．石器・石製品・金属製品 …… 37

図版目次

図面図版

図版１　遺構全体図
図版２　遺構実測図(1)
図版３　遺構実測図(2)
図版４　遺構個別実測図（SB１・SB２）
図版５　遺構個別実測図（SB３・SB４・SB６）
図版６　遺構個別実測図（SB５・SE１・Pit１・Pit２・SK１・SK２）
図版７　弥生前期、SK１・SK２出土遺物
図版８　弥生・古墳時代の土器(1)
図版９　弥生・古墳時代の土器(2)
図版10　弥生・古墳時代の土器(3)
図版11　弥生・古墳時代の土器(4)
図版12　弥生・古墳時代の土器(5)
図版13　弥生・古墳時代の土器(6)
図版14　弥生・古墳時代の土器(7)
図版15　弥生・古墳時代の土器(8)
図版16　弥生・古墳時代の土器(9)
図版17　古代・中世の土器
図版18　木製品(1)
図版19　木製品(2)
図版20　石器・石製品(1)
図版21　石器・石製品(2)
図版22　石器・石製品(3)

写真図版

図版23　遺跡周辺の航空写真
図版24　遺跡の空中写真
図版25　土層断面・遺物出土状況
図版26　上層の状況
図版27　遺構検出状況
図版28　上層の遺物・下層の状況
図版29　遺物出土状況
図版30　弥生・古墳時代の土器(1)
図版31　弥生・古墳時代の土器(2)
図版32　弥生・古墳時代の土器(3)
図版33　弥生・古墳時代の土器(4)
図版34　弥生・古墳時代の土器(5)
図版35　弥生・古墳時代の土器(6)
図版36　弥生・古墳時代の土器(7)
図版37　弥生・古墳時代の土器(8)、墨書土器
図版38　古代・中世の土器、木製品(1)
図版39　木製品(2)
図版40　石器・石製品等

第１章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

奈良崎遺跡は新潟県三島郡和島村大字島崎に所在する。和島村は日本海海岸より約４km内陸に位置し、新潟県の海岸線のほぼ中心にあたる。近隣には出雲崎町・寺泊町など漁業の盛んな港町や中核都市の長岡市、その郊外の三島町・与板町が接している。遺跡は村北部の寺泊町との境界付近にあり、島崎集落を南方に望む標高約40mほどの舌状に突き出た丘陵とその周辺に広がっている。島崎城郭跡・塚・古墳・遺物散布地などがあるが、丘陵部は国道116号線バイパス建設により消滅している。遺跡の丘陵下に流れる郷本川は西流し日本海に至るが、明治時代に大河津分水路が完成するまでは信濃川支流の西川に注いでいた。この河川に沿って県道郷本駒原停車場線が河口まで続いている。現況は山林・畑地・水田などである。

２．地理的環境

和島村周辺の地形は、村の東西を走る低丘陵地帯とその間を流れる島崎川などの小河川により形成された沖積平野に大別される。これらの地形は「新潟方向」と呼ばれる地層の褶曲軸によるもので、新潟県中越地方から下越地方に見られる。この軸は南南西―北北東の方向性を持っているが、これは地層が横の圧力を受けたときに出来る「皺」の向きと言え、盛り上がった部分は丘陵となり、沈み込んだ部分は谷を形成しやがて埋没して低湿地や沖積平野を形成する。この起伏が河川や洪積台地を形成する上で大きな要因になったと考えられる。

第１図　遺跡の位置

東西丘陵で確認された地層に含まれる貝化石・珪藻化石・火山灰などから形成された時代や環境が明らかになってきている。第三紀鮮新世の頃は海中に没していたが、褶曲運動と土砂の堆積により第四紀更新世前期～中期には浅い海となり、その後次第に内湾、潟へと変化した様子が確認できる。それぞれの時代の標識層は古い順から西山層・灰爪層・魚沼層と呼ばれている。

奈良崎遺跡周辺から島崎集落にかけて立地する平坦な台地は洪積台地と呼ばれ、更新世において川の氾濫源として堆積した地層が浸食基準面の低下によって台地状に残ったものと考えられる。その後の沖積世においても河川の洪水と土砂の堆積作用により谷地形は徐々に埋没し、沖積低地が形成され現在にいたっている。昭和37年に撮影された空中写真では、沖積平野の中でも畑が耕作され以前の微高地を示すと思われる地割の変化が観察できる（図版23）。

この沖積低地では、植物が腐食してできた泥炭層を厚く堆積させ軟弱地盤を形成する。昭和期の土地改良が行われる以前の水田では、田植えなどの耕作にも苦労が耐えなかったという。圃場整備工事が行われる平成12年度以前でも水はけが悪く梅雨には辺りの水田が冠水するのが常であった。これは島崎沖積地の上流と下流との高低差が小さくなり、排水がうまく出来ない状況にあったためである。

3．歴史的環境

和島村には新潟県教育委員会に登録されている周知の遺跡が約190ある。発掘調査により詳細がわかる遺跡はまだ少ないが、同一時代の発掘調査例が蓄積されつつあり、遺跡間の相互の関係が考察できるものもある。ここでは各時代の遺跡立地を中心に、発掘成果などもあわせて記述していきたい。

確認できる遺跡は、主に縄文時代からで18ヶ所確認される。遺跡の多くは東側の丘陵付近に立地している。十二遺跡では昭和22年に試掘調査が行われ、後期前葉～中葉の土器が大量に出土している。遺跡は島崎川の支流、阿弥陀瀬川の上流左岸で舌状に突き出た台地に立地している。出土地点により二時期に分けられ、後期前葉の三十稲場式土器・南三十稲場式土器の一群と後期中葉の三仏生式土器が出土している。後者の土器群は竪穴住居の発見された地点に見られられたという。西側の丘陵では奈良崎遺跡に近接した大武遺跡で埋没谷が検出され、前期前葉の羽状縄文土器や晩期前半の羊歯状文・蛇形文を施した土器のほか、クルミ貯蔵穴や組合式石斧、漆製品など重要な遺物が出土している。発掘調査件数が少なく集落の把握がまだ不可能な段階だが、今後沖積低地や東側の丘陵地帯で発見される可能性もあろう。

弥生時代の遺跡では中期後半からの遺物が確認される。松ノ脇遺跡は低丘陵上とその週辺に立地し、北陸系の櫛描文土器と中部高地系の栗林式土器、東北系の宇津ノ台式土器・川原町口式土器・天王山式系土器を出土した。このことから３系統の異なる地域圏が錯綜する地点であることがわかる。また、北陸地方の遺跡で顕著な玉作りを示す遺物は、僅かではあるが必ずといっていいほど確認される。県内の代表的な遺跡である佐渡新穂玉作遺跡群や柏崎市下谷地遺跡などの影響下に営まれたものとも考えられる。また、前期～中期に見られる土坑墓や再葬墓などは阿賀野川以北に多いが、寺泊町竹森の諏訪田遺跡で土坑墓６基が発見され、そのうち１基は木棺墓であった。櫛描文土器や玉類とその未製品なども多量に出土しており、北陸地方の特徴を表している。

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭になると遺跡数は増えるが立地は中期同様に低丘陵上が主体である。西側の丘陵では、後期終末以降の姥ケ入南遺跡で鉄剣を副葬した墳墓が、奈良崎遺跡では後期終末から古墳時代初頭の円形周溝墓や前方後方型墳墓、銅鏡を副葬した古墳などが検出されている。このことから、社会的な階層の分化と地域支配の強化が行われ、小規模ながら首長の墳墓が造営されたことが分か

る。東側の丘陵では、後期後半の高地性集落が多く発見されている。中心となるのは赤坂遺跡群で、島崎川低地との比高差は約80mに達し、林道の切り通しには「V」字形の濠や土坑・竪穴住居と推定される落ち込みの断面が確認される。遺物は、後期後半の土器や緑色凝灰岩の管玉などがコンテナで1箱程度表面採集されており、北野の大平遺跡同様に玉作りが盛んに行われていたようである。沖積平野に接する上桐神社裏遺跡やヤケ山遺跡などは赤坂遺跡群・大平遺跡の支群とも言える。これらの遺跡は未調査のため詳細は不明だが、古墳時代前期初頭の土器は見つかっていないことからこれ以降は存続しなかったと思われる。

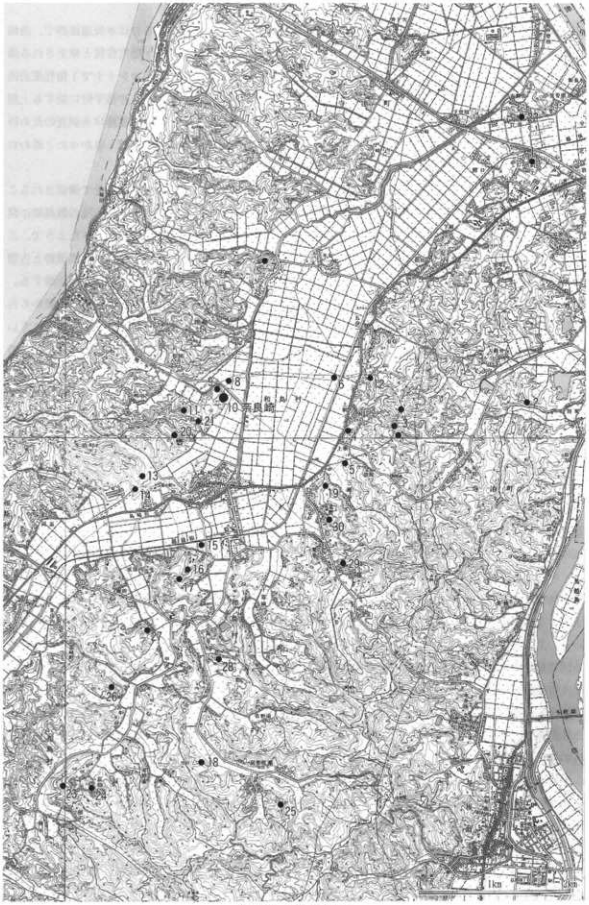
古墳時代前期中葉の布留式併行期になると再び遺跡が確認されるが、立地は沖積低地上で確認されることが多い。門新遺跡・山田郷内遺跡・下ノ西遺跡などは島崎川によって形成された沖積低地の微高地に営まれた遺跡である。小規模であるが古墳時代後期にいたるまで低地を水田として開発してきたようで、これらの遺跡は若干の空白期間を持つが断続的に古代・中世まで営まれている。和島村では集落遺跡と古墳がセット関係にある遺跡は不明であるが、下小島谷古墳群は北方の下ノ西遺跡とごく近接して立地する。古墳群は2基の小型前方後方墳と方墳1基により形成され、遺物は確認されていないが形態的特徴から古墳時代前期と考えられている。寺泊町町軽井の大久保古墳群でも同様な前方後方墳が2基確認されている。こうした小規模な古墳は、巻町山谷古墳や三条市山王山四号墳などの同形墳と比べても小さく、どのような位置付けがされるべきかが今後の課題である。

7世紀初めまで、現在の北陸地方は越国と呼ばれていた。続いて持統朝（690年頃）に越国分割が行われるが成立当時の領域は阿賀野川以北と考えられる。大宝2（702）年にはそれまで越中国に属していた頸城・魚沼・蒲原・古志の4郡が越後国へ編入され、その後建郡された出羽郡が和銅5（712）年に出羽国となり、越後国の領域が確定した。9世紀前半には古志郡から三嶋郡が分割され、前述の4郡と三嶋・沼垂・岩船の3郡、計7郡が越後国を構成していた。

島崎川流域は古代の遺跡が集中している地域で、集落跡・窯跡・製鉄関連遺跡・製塩遺跡のほか官衙関連遺跡が注目される。寺泊町竹森には横滝山廃寺があり、越後の古代初期寺院として著名である。和島村には延喜式（延長5・927年成立）に記載された式内社に比定される桐原石部神社・宇名具志神社が存在する。官衙関連遺跡の八幡林遺跡・下ノ西遺跡はそれぞれ数か年にわたり発掘調査が行われた。八幡林遺跡は島崎川上流部の沖積地に面した丘陵平坦部を中心に四面庇付建物・掘立柱建物郡を造営し、多量の墨書土器・木簡が出土した。時代は8世紀前半代が官衙施設、9世紀以降は郡司（大領）の居宅と考えられている。下ノ西遺跡は沖積地の微高地上に営まれ同様に多量の木簡を出土したが、8世紀前半頃と考えられる国司借貸の木簡などが注目される。この遺跡は計画的に配置された大型掘立柱建物群や道路状遺構などより官衙的な様相を持つ。また、越後国の駅の一つである「大家駅」と記された墨書土器が八幡林遺跡より出土し、馬の洗い場と思われる大型土坑が下ノ西遺跡より検出されたことから、駅がこの周辺である可能性が高い。両遺跡は約1.5kmの距離にあり、また南方の丘陵部には旧北辰中学校瓦窯跡、西方には出雲崎町の梯子谷窯跡などが存在し、古志郡内の中枢地域であったと考えられる。

島崎川下流の沖積地の微高地に立地する門新遺跡では、溝や柵で区画された外郭施設と船着場を持つ庇付建物群が検出された。主屋の雨落溝から出土した漆紙文書には「延長六年」（928）と記されていることから前述の2遺跡より新しい時代の遺跡である。この遺跡は、律令制の変質・崩壊による郡衙解体後に独自の私的経済活動と土地開発を行った開発領主層の拠点と考えられる。

11～12世紀にかけて、中世社会では在地富裕農民と中央の権門による荘園体制が構築され、安定した耕作と収量を目指すため様々な方法がとられた。田地開拓・荒廃地の再開発・用水の整備など開発分野のほ



第２図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代	備考
1	横滝山廃寺	寺泊町竹森	奈良・平安	廃寺跡・遺物包含地
2	大久保古墳群	寺泊町町軽井	古墳前期	古墳２基
3	赤坂遺跡群	和島村上桐	弥生後期	高地性集落？
4	上桐神社裏	和島村上桐	弥生後期	遺物包含地
5	松ノ脇	和島村上桐	弥生中期	遺物包含地
6	門新	和島村上桐	古墳前期・平安	掘建柱建物跡
7	夏戸城跡	寺泊町夏戸	中世・戦国期？	城跡
8	大武	和島村島崎	縄文～中世	生産遺跡
9	島崎城跡	和島村島崎	中世	城跡
10	奈良崎	和島村島崎	弥生後期～中世	遺物包含地
11	蛯ケ入南	和島村島崎	弥生後期終末～古墳前期	墳墓
12	ヤケ山	和島村上桐	弥生後期	遺物包含地
13	山田郷内	和島村島崎	古墳・古代・中世	鍛冶工房跡
14	八幡林	和島村両高・島崎	奈良・平安	官衙関連遺跡
15	下ノ西	和島村小島谷	奈良・平安	官衙関連遺跡
16	旧北辰中学校裏	和島村小島谷	奈良	瓦窯跡
17	下小島谷古墳群	和島村小島谷	古墳前期	古墳３基
18	十二	和島村阿弥陀瀬	縄文	遺物包含地
19	大平	和島村北野大平	弥生後期	遺物包含地
20	立野大谷製鉄	和島村島崎		製鉄関連遺跡
21	蛯ケ入製鉄	和島村島崎字蛯ケ入		製鉄関連遺跡
22	諏訪田	寺泊町竹森	弥生中期	土坑墓・木棺墓
23	高畑城跡	和島村高畑字入山	戦国期	城跡
24	高畑館跡	和島村高畑字前田	南北朝・戦国期	館跡
25	阿弥陀瀬城跡	和島村阿弥陀瀬		城跡
26	中村城跡	和島村中沢堂ノ河内		城跡
27	中沢古銭出土地	和島村中沢宮ノ河内	戦国期	
28	小島谷城跡	和島村小島谷中ノ東		城跡
29	根小屋城跡	和島村根小屋神明	南北朝	城跡
30	入り館	和島村北野入り	室町期	城跡

第１表　周辺の主要遺跡一覧

か、肥料の改良・農工具の発達など生産技術の向上も見られた。この背景には、律令時代に管理されていた様々な職掌の人々やその技術が律令制崩壊により、専門的職業として独立発展し各地に広がったことと、貨幣経済や都市の成立など流通面でも大きく発展するという過程があるのだろう。

中世の遺跡では山田郷内遺跡・大武遺跡・奈良崎遺跡など発掘調査例は少ないが、居館跡や山城跡・鍛冶工房跡・製鉄関連遺跡・塚（時期不明も含む）が確認されている。山田郷内遺跡は島崎集落を南方に望む丘陵部に立地し、鍛冶工房跡と思われる建物跡を検出しており、出土した陶磁器などから13～15世紀頃のものと考えられている。斎串や呪符・人面墨書石など中世の精神生活を示す遺物も注目される。大武遺跡では水田跡や井戸などが検出され、14～15世紀の漆器や珠洲の瀬戸・美濃・白磁などの陶磁器が層位的に出土している。出土した銅製の花瓶や呪符・斎串などから水田での儀礼祭祀が行われた可能性がある。奈良崎遺跡では島崎城に比定される山城跡が発見されており、以前より縄張図が作成されていた。島崎城は「色部高長軍忠状案」に「島崎城郭」と記述があり、建武三年（1336年）に南朝方の小木・風間・河内・池氏らが立てこもる島崎城を北朝方の色部氏が攻め落としたとある。近年、国道116号線バイパス建設に伴う発掘調査が行われた結果、大型の溝や掘立柱建物群、井戸跡などが見つかり南北朝期の山城跡であることが判明した。山城跡は東西両丘陵で数多く発見され、県内でも黒川町・中条町とともに有数の密度である。奈良崎遺跡の北北西には県指定史跡の夏戸城跡がある。時期は不明であるが周辺の地名から、城の施設や城下町を示す地名が残っている。館跡については村内で６ヶ所あるが、山城跡と結びつくものは、北野城と入り館・高畑城館・村岡城と落水館の３ヶ所となっている。

第２章　調査概要

１．調査に至る経緯

二級河川郷本川は島崎川の支流で、和島村島崎集落を抜けて西へ分流し寺泊町郷本で日本海に至る。島崎字小谷地区から郷本川分岐点周辺では、沖積低地特有の軟弱地盤と排水機能が低く、例年梅雨時には水田が冠水する地域であった。この状況を改善するため川幅の拡張と流量を安定させる改修工事が、和島村村内では平成12年度以降に行われることとなった。

和島村大字島崎の奈良崎遺跡は、遺跡台帳に登録された周知の遺跡で国道116号線和島バイパス工事に伴う発掘調査が数次にわたり行われている。今回の河川改修地区の内、遺跡の周縁部に当たる約1,000㎡については本発掘調査が必要であった。平成12年４月21日付けで、和島村教育委員会は新潟県与板土木事務所を経由して新潟県と発掘調査委託契約を交わしている。

２．調査・整理の経過

発掘調査は平成12年５月11日～11月30日まで行われた。調査面積は上層（平安時代以降）で約1,100㎡、下層（弥生・古墳時代）で900㎡である。出土した遺物量はコンテナ（38×13×53㎝）に換算して約35箱である。なお、多量な遺物量のため、単一年度での遺物整理・報告書刊行は現体制では困難であることから平成13年度に行った。

５月11日より作業員を動員して現場での作業準備に取り掛かる。また、プレハブや発電機・ベルトコンベアー・水中ポンプなどの機材搬入や設置を行う。23日には、バックホーにより表土などの無遺物層の除去を始めた。掘削の際に安全面から調査壁は１ｍほどの法面を作り壁面の崩落を予防することにした。50㎝程掘り下げると（暗）灰色粘土層となり遺物が出土し始めた。これと併行して排水用の溝を調査区壁際に造りポンプを設置していく。６月初旬より移植ごてによる本格的な人力掘削を行う。排土はベルトコンベアーを使用して調査区脇に集積した。６月15日には墨書土器など平安時代の遺物がある程度出土するとともに、西側の丘陵裾部分では以降が確認され始める。７月中旬には平安時代を主体とする遺物包含層を完掘し、この時点で把握できる遺構を精査しマーキングを行った。７月25日には１回目の空中写真測量をラジコンヘリコプターにより実施した。

その後、地山の露出していない泥炭層下にある古墳前期の遺物包含層を除去する作業に移った。この遺物包含層は予想以上に高密度で、９月末頃まで取り上げ作業が続いた。本来、調査区内の西側部分についても掘削の予定であったが、無遺物の地山層が全調査範囲の１/３ほどを占め、さらに以前の耕作によると見られる遺構の削平された部分もあるなど、掘削に要する時間と労力が削減されることになった（これにより、平成13年２月26日に委託契約の変更を行う。）。しかし南～東部分では包含層が徐々に下がっており、一番深い部分では現地表面から1.6mほどの比高差があった。丘陵部から離れるにつれ泥炭層は厚くなり、調査壁の崩落が心配されたためコンパネと六尺杭で補強することにした。包含層除去と遺物取り上げ作業がほぼ終了した10月初旬から遺構の精査と発掘を行う。11月８日には遺構発掘作業を終え２回目の空中写真測量を行った。また、11月11日より調査と併行して遺物洗浄や注記作業など基礎整理を行う。11

月30日までに機材撤去・重機による埋め戻しを行い、現場作業は終了した。引き続き基礎整理は続行し、翌年の平成13年３月23日をもって平成12年度の事業を終了した。

前述の理由から報告書刊行とそれに伴う遺物整理は、平成13年度中に行うことになった。平成13年５月１日付けで委託契約を与板土木事務所と交わし、和島村教育委員会の遺跡整理室で遺物注記・接合・復元・実測・写真撮影・図版原稿作成などの作業を行った。

3.グリッドの設定

調査区は、平成12年度報告済みの圃場整備排水路部分と統一性を持たせるため同一のグリッドで合わせた〔和島村教委2001〕。また、今回の河川改修部分の名称も便宜上、Ⅳ区としておく。

グリッドは、川筋方向とそれに直行する形で10m四方に組み、北方位を優位として順にアルファベットとアラビア数字でグリッド杭の名称を付した。従って、国家座標軸とは一致しない。遺物の取り上げに際してはさらに２m四方ごとに分割し、１～25までの番号を付け小グリッドとして出土地点を記録した。

杭	X座標	Y座標	Z座標	杭	X座標	Y座標	Z座標
A 1	176333.301	21490.074	13.767	F 2	176290.675	24218.058	12.482
B 1	176326.180	24197.095	12.708	E 5	176276.733	24189.674	12.572
E 1	176304.817	24218.158	12.593	E11	176234.607	24146.948	12.734
C 3	176305.017	24188.874	12.768	E13	176220.565	24132.706	12.908
F 1	176297.696	24225.179	12.549	E15	176206.523	24118.464	12.909

第３図　調査範囲とグリッド設定図

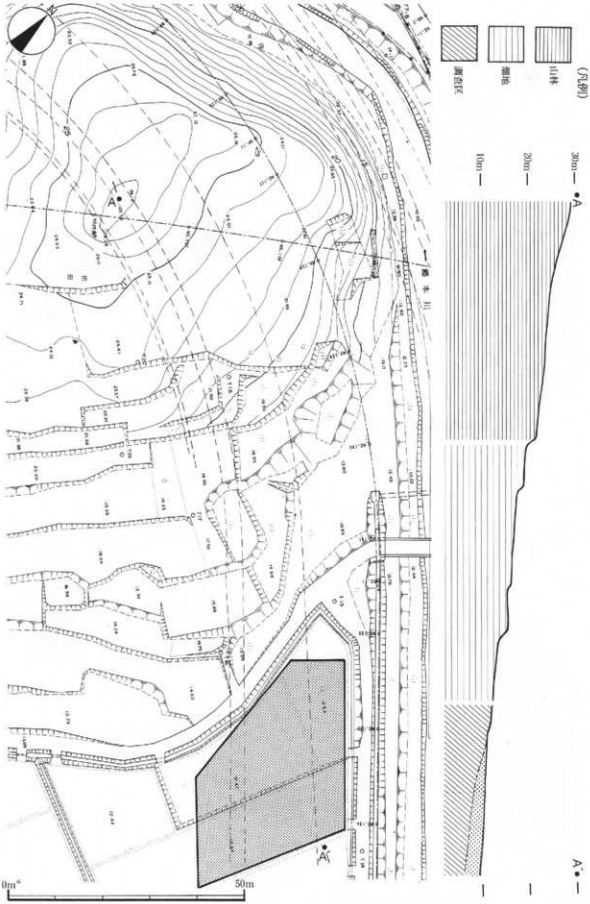
4．地形と層序

調査区周辺の測量図を見ると水田の標高は約12.4mに保たれているが、これは人為的に整地された結果である。実際に調査を行ってみると、黄褐色粘土の地山層が西側の丘陵寄りで検出された。調査区中央付近では地山層が突き出た形にあり、旧地形の沢を形成していた。この地山層は、耕作のため削平され遺構が完全に無くなり平坦になった部分もあるが、掘建柱建物の柱穴が検出されていることから旧地形の傾斜もある程度緩やかなものであったと考える。また傾斜が急になる落ち込み付近より深い部分については、遺構の残り具合と遺物の出土状況から当時のままの堆積と考える。

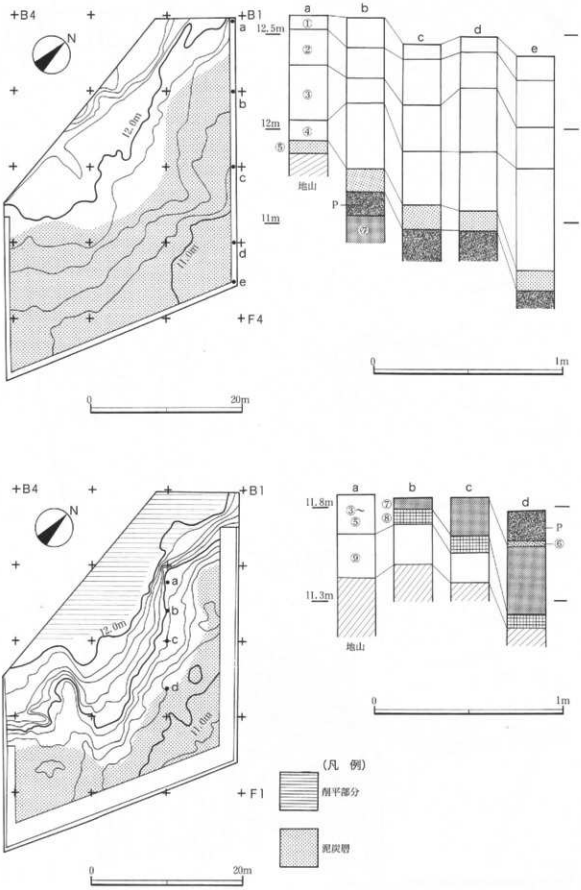
土層の観察は調査区壁とグリッドの縦ラインに沿って観察用ベルトを残し、任意の地点で行った。遺物包含層は基本的に丘陵側から徐々に落ち込んでいき、遺物をほとんど含まない泥炭層（P）を間層として挟む。また、丘陵部から離れるほど層の厚さは薄くなる傾向にある。遺物包含層には、概ね中世の遺物を含む④層（灰色粘土Ⅱ）、平安時代の⑥層上面（暗茶褐色土）、弥生時代後期～古墳時代の⑦（暗灰色粘土の⑦´層も同様）・⑧層（黒色粘土の⑧´層も同様）がある。便宜的に①～⑥層を上層、⑦・⑧を下層とした。

本調査区での基本的な層序は以下のとおりである。

①層：表土	以前の整備での盛り土の可能性もある。
②層：耕作土	黄色味の強い粘土に青灰色の粘土が混じり粘性・しまりがある。
③層：茶褐色土	茶褐色の腐植土と灰色系の粘土が混じりあう。粘性がある。
④層：青灰色粘土	均一に堆積しておりＥ１付近などの深い所では厚みを増し、腐植土がマーブル状に堆積することもある。
⑤層：灰色粘土	炭化物が混じり中世の遺物が僅かに出土する。粘性がある。
⑥層：茶褐色粘土	腐植物が僅かに混じる。平安時代の遺物包含層。粘性がある。
⑦層：暗灰色～黒色粘土Ⅰ	炭化物を多量に含み粘性・しまりが強い。主に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層である。泥炭層の深い場所では黒色となり粘性･しまりともになくなる。この場合⑦´層とした。
⑧層：黒色粘土Ⅱ	⑦層同様に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層であるが厚さは薄い。泥炭層の深い場所では黒色となり粘性･しまりともになくなる。この場合⑧´層とした。
Ｐ層：泥炭層	植物が腐植し堆積したもので遺物を含まない間層となっている。
⑨層：暗灰色粘土	地山漸移層で遺物は殆ど出土しない。
地山：黄褐色粘土	調査区西側の丘陵につながる。部分的に青灰色を呈し還元状態にある。



第４図　遺跡周辺の地形



第５図　調査区の地形と層序

第３章　遺構と遺物

１．検出遺構

(1)　概要（図版１～３）

検出された遺構は、主に地山層に分布し高所のものは浅く不明瞭だが落ち込み際のものは残りが良い。これは耕作や整地によって、本来なだらかな傾斜であった上部（調査区西側）が削平された結果と考えられる。遺構は、掘立柱建物６棟・井戸１基・土坑２基ほか多数のピットが確認されたが、多くは遺物が供伴しなかったため時期不明のものが多い。遺構の配置を見ると、弥生後期～古墳時代前期の土坑（ＳＫ１・２）は地山の標高が落ち始める地点にあり、これより低い所では確認されなかった。当時はこれらの土坑より低い場所は低湿地であったと考えられる。これに対し、平安時代以降の掘立柱建物（ＳＢ１・２）や井戸（ＳＥ１）・ピット（Pit １・２）は傾斜の安定している上部で検出された。

(2)　各説

ａ）掘立柱建物

１号掘立柱建物（図版４）

調査区の西端Ｄ３グリッドで検出され一部は調査区外へ伸びている。柱穴は直径40cm、深さ40cm程度で平面形は円形ある。覆土に黒色の炭化物を多く含む柱穴があるが遺物は出土していない。検出面は地山層である。調査区の中では比較的平坦な場所に立地している。

２号掘立柱建物（図版４）

調査区の西側Ｄ３グリッドで検出された。桁行き２間×３間の建物で、柱穴は直径40cm、深さ15cm程度で平面形は円形もしくは楕円形である。南側の柱は、１号掘立柱建物よりも上層の黒色粘土の堆積土に掘り込まれ、覆度は灰色粘土に炭化物などが混じる。遺物は出土していない。

３号掘立柱建物（図版５）

調査区の西側Ｄ２グリッドで検出された。桁行き１間×２間の建物で、柱穴は直径30cm、深さ15cm程度で平面形は円形である。覆度は暗灰色の粘土であるが遺物は出土していない。

４号掘立柱建物（図版５）

調査区の中央付近Ｃ２グリッドで検出された。桁行き２間×３間の建物で、柱穴は直径40cm、深さ17cm程度で円形の掘り方をもつ。西側の柱穴は検出できない箇所もあった。覆度は暗灰色の粘土であるが遺物は出土していない。地山層がなだらかに傾斜する場所に立地している。

５号掘立柱建物（図版６）

１号・２号建物と重複して検出された。西側は不明であるが南北方向を長軸とする２間×３間の建物と推定される。柱穴は40cm程の長楕円を呈する。覆土は灰色の粘土で遺物は出土していない。

６号掘立柱建物（図版５）

３号掘立柱建物と重複する。桁行き１間×３間の建物で、柱穴は直径30cm、深さ20cm程度である。覆土は暗灰色粘土で遺物は出土していない。

b）井戸

1号井戸（図版6）

調査区の西側（地点グリッド）の平坦面にある。地山削平のためにこの遺構も削られていると思われる。規模は2×1.9m、深さ0.8m以上。木製の井戸枠が検出された。遺物は上層から9世紀代の須恵器（坏・壺底部）が、また井戸枠内からは炭化した木片が出土している。

c）土坑

1号土坑（図版6）

C1－19グリッド、地山の落ち込み際で検出された。70×60cmの円形で、深さ15cmで底部は椀状になる。覆土は腐植土と底面の砂層である。遺物は上面で木製の鋤と弥生時代後期後半の甕形土器口縁部が出土している。

2号土坑（図版6）

D3－15グリッド、地山の落ち込み際で検出された。75×73cmの円形で、深さ21cmで底部は椀状になる。覆土は腐植土と底面の砂層である。遺物は甕形土器の胴部片が出土している。

d）ピット

1号ピット（図版6）

C2－24グリッド、1号井戸の南側で検出された。133×106cmの楕円形で、深さ12cmと浅いため削平された可能性がある。底面が平坦で柱穴も存在するので掘方と考えるべきか。覆土は黒色の炭化物で9世紀代と思われる土師器の坏が出土しているが、遺存状態が悪く図化は出来なかった。

2号土坑ピット（図版6）

D3－2グリッド、2号建物の北側で検出された。直径90cmの円形で深さ50cmを測る。1号ピット同様柱穴跡と思われるが対応する柱穴は見出せなかった。出土遺物は須恵器の碗と土師器の底部である。遺物の年代は9世紀代と考えられる。

名称	位置	形態	長軸	短軸	深さ	遺物など	名称	位置	形態	長軸	短軸	深さ	遺物など
SK1	C1-19	不整	70	60	15	鍋・甕	Pit1	C2-24	楕円形	133	106	12	
SK2	D3-15	不整	75	73	21	甕胴部	Pit2	D3-2	円形	90		50	須恵器等
SB1-1	D4-3	円形	40		18		SE1	C2-18・19	不整	200	190		須恵器等
SB1-2	D3-23	円形	38		23		SB4-1	C2-4	円形	32		16	
SB1-3	D3-17	円形	33		40		SB4-2	C2-4	円形	41		17	
SB1-4	D3-16	円形	42		43		SB4-3	C2-5	円形	38		21	
SB2-1	D3-13	円形	100		5		SB4-4	D2-1	円形	51		16	
SB2-2	D3-13	円形	41		16		SB4-5	C2-9	円形	41		13	
SB2-3	D3-8	円形	43		26		SB4-6	C2-9	円形	40		17	
SB2-4	D3-3	円形	42		26		SB4-7	C2-10	円形	38		18	
SB2-5	D3-6	円形	37		33		SB4-8	D2-6	円形	38		13	
SB2-6	D3-6	円形	39		19		SB5-1	D3-18	長楕円	41	28	13	
SB2-7	D3-11	円形	41		19		SB5-2	D3-18	長楕円	40	29	7	
SB2-8	D3-16	円形	32		40		SB5-3	D3-17	長楕円	39	27	12	
SB2-9	D3-17	円形	31		10		SB5-4	D3-11	長楕円	54	47	21	
SB2-10	D2-12	円形	22		6		SB5-5	D3-16	長楕円	50	46	15	
SB2-11	D2-7	円形	38		13		SB6-1	D2-23	円形	20		28	
SB2-12	D2-2	円形	45		15		SB6-2	D2-18	円形	24		26	
SB3-1	D2-3	円形	35		19		SB6-3	D2-12	楕円形	32	29	8	
SB3-2	D2-18	楕円形	24	20	11		SB6-4	D2-16	円形	26		14	
SB3-3	D2-11	円形	44		8		SB6-5	D2-17	楕円形	25	18	18	
SB3-4	D2-16	円形	26		14		SB6-6	D2-22	楕円形	29	18	12	
SB3-5	D2-22	円形	36		11		SB6-7	D3-3	楕円形	32	28	30	
SB3-6	D3-2	円形	20		18								

第2表　遺構観察表

（単位：cm）

2．出土遺物

(1) 概要

出土した遺物には、弥生土器・古墳時代の土師器・古代の土師器・須恵器・中世陶磁器・木製品・石器などがある。主体となるのは弥生後期から古墳時代前期までであるが、遺構出土のものは少なく殆どが遺物包含層出土である。これらは、丘陵上の遺跡本体を取り巻くように出土し、遺構が確認されなくなる地山の落ち込み際から、高密度で出土している。旧地形の復元から、沢状の小さな谷が低湿地化した環境だったと考えられる。弥生時代の土器は、後期後半が主体で北陸南西部の法仏式から月影式にほぼ相当する。これらの多くは古墳時代の多数の遺物が出土する⑦・⑧層から散発的に出土し、おそらくは遺跡丘陵部からの流れ込みの可能性が強く主体的なものではない。古墳時代の遺物は前期を中心に中期・後期の遺物を僅かに含むようである。また、遺構出土遺物としては１号土坑出土の甕・鋤、２号土坑出土の甕胴部片がある。古代の遺物は、墨書土器を出土したほかには、散発的な出土である。１号井戸出土の遺物は有台坏・碗・壺底部の外は細片程度であった。中世の遺物では、珠洲系陶器・土師器皿・木製品などが出土しているが破片資料が多い。なお、遺物観察表と出土遺物重量分布図（第６図）を別に設けたので参照されたい。

(2) 弥生・古墳時代の土器

弥生土器では、１のみ前期のものであるが、概ね後期後半に属し北陸南西部の法仏式～月影式に相当すると考えられる。出土量は古墳時代の土器につぎ多い。全体の器形が分かるものは少なく口縁部～胴部の破片資料が多い。胎土には海綿骨針が観察できるものが多く、この時代の土器を特徴付けるものと言える。

古墳時代では、前期の範囲に収まるものが多い。概ね前期後半に該当する。甕を中心に全体の器形を窺えるものが多い。

この時代の土器は、遺構出土の土器が少ないこともあって時期を明確に区分することが難しい。従ってここでは個々の形態的特徴を把握することを主眼とし、時期特定は後述することにする。

a）甕形土器（図版７～11）

１は内外面を条痕状の調整を施した弥生時代前期と思われる甕である。口縁が緩く開き長胴を呈すると思われる。口縁部を内外面から交互に、板状工具で刺突する。底部は平底で径9.6cmを測る。出土地点はＥ３－４・⑦層で、単独で集中的に出土したが遺存状態が悪く口縁部と底部のみ図化した。

遺構出土では１号土坑の甕（３）がこれに相当する。口径は17cmで胴部最大径を大きく上回る。外面全体にはススが付着している。口縁部調整はヨコナデで端部を上に摘み上げる。胴部は内外面ともにハケメである。焼成は良好で胎土に海綿骨針を含む。２号土坑の甕胴部片（４）は底径5.6cm、胴部最大径は23.6cmで、張りが強い。外面は間隔の粗いハケメだが炭化物が厚く付着している。内面はナデで丁寧に調整され光沢面を残している。

５～18は北陸西部の法仏式・月影式の特徴をもつ土器である。５は、口縁部が緩く開くものでヨコナデにより端部を引き伸ばし、面取りを行っている。口頸部と胴部の境界には板状工具による刺突文が施される。内外面ともにハケメが施され、外面には炭化物が付着する。６～８は「く」の字形に屈曲する口縁部の端部に、２ないし３条の（擬）凹線文を施している。口縁端部の断面はヨコナデによって、上下に伸び「T」字形を呈する。６は胴部に板状工具による刺突文が施される。７は胴部内面を削っているが、これ

は北陸西部に多い特徴である。9～11は、口縁部がヨコナデにより上に伸び受け口状を呈する。9・11は胴部に板状工具による刺突文を施す。9は外面に厚く炭化物が付着するが、内外面ハケメである。10は口縁部下端に板状工具による刺突文を施す。胴部上位には櫛歯による列点文と波状文が施されている。胴部下位には炭化物が厚く付着している。胴部に文様を施す同様の類例は未確認だが、文様の技法自体は近江系の土器などでよく見られるものである。12・13はいわゆる有段口縁の甕である。12は口縁部側面に4条の擬凹線文を施し、条の幅は細かい。12は淡褐色の色調で緻密な胎土で焼成は良い。13の胴部には板状工具による刺突文を施す。14は無文の有段口縁で内面にはケズリが見られ、胎土には海綿骨針が含まれる。15～18は「く」の字に開く口縁部で、端部はヨコナデにより摘み出され尖る。頸部はハケメの後にヨコナデを行うが完全にハケメの跡は消えていない。15・17は胎土に海綿骨針を含む。15・16は単位の幅が広く粗いハケメで調整しているが、ハケメの方向が各部位で一致しており、口縁部端部の処理や頸部に繋ぎ目を残すなどつくり方も同様の印象を受ける。17も同様の口縁端部であるが屈曲する角度がきつい。胴部外面の調整は、通常のハケメとは違った印象で判断が難しい。口径16cmで褐色から灰褐色を呈する。

19～30は口縁部が「く」または「コ」の字形を呈するもので、端部の処理によって細分される。21は間隔の広いハケメを施し外面には炭化物が付着している。19・20・22～26は口縁端部を上方に摘み上げる。19・20・22は頸部で一旦くびれた後、端部付近でさらに折れ「コ」の字形を呈する。27・28は「く」の字口縁で端部が面取りされる。いずれも胎土に海綿骨針を含む。27は底部を除き復元できたもので、口径14.8cmで褐色を呈するが外面はススが付着する。29は口縁部がほとんど開かないもので端部は鉤爪形となる。30は長めに開く口縁部の下端が垂下する。口径15.8cmで胴部はあまり張り出さない。

31～35は口縁部の外反が強く「コ」の字形になる。口縁端部は面取りされるものが多いが上下に強調されるものではない。36は長めの口縁部でヨコナデを行うが端部の処理はあまり意識された印象を受けない。胴部に最大径を持ち強く張り出す割には底部が小さく、径は2.5cmである。E3－23・⑦～⑦′層から破片がまとまって出土し、ほぼ復元できた。37は短く屈曲する口縁部で長胴形となる。胴部内面はケズリ、外面は細かいハケメである。また内面には焦げが、外面には吹きこぼれと見られる炭化物が付着する。口径15.6cm、高さ25.1cm、底径3.5cmでほぼ全形を復元できた。E3－18・⑦′層よりまとまって出土した。38は短めの「く」の字口縁に倒卵形の体部を持つ。調整はハケメであるが、頸部では右下がり底部では真下の方向に行われている。口径17.4cm、底径4cmで底部内面に焦げが観察できる。39は「く」の字口縁で、ヨコナデを施し端部は面取りをする。口径14.4cmで胴部は強く張り出す。41はE3－12・⑦層出土の小型甕である。完形品で直立して出土した。口縁部は長めで緩く外反し、胴部は寸胴の球形、底部は平底となる。42と同様口縁部はヨコナデで端部を丸くし、胴部はケズリ・ハケメの痕跡を残す。43・44・47・49は有段口縁甕である。44は口縁部に幅が2mmほどでやや広く扁平な擬凹線文が施されている。外面は炭化物が付着している。49は受け口状の口縁で近江系であろうか。43・47は明確な段部を作らず外面のみ段差を作る。45は口縁部を強いヨコナデにより挽き出し、内面を削る。口径は13.4cmと小型である。胎土には海綿骨針を含む。46は口縁部が最大径となる甕で外面に炭化物が付着している。端部にはヨコナデにより面取りされる。端部には沈線が1条みられる。48の口縁部は短めでヨコナデを行わずハケメを残す。つくりは粘土の繋ぎ目を残すなど粗雑な印象である。

50～55は、口縁部が「く」の字形で胴部が球形に張り出すもので、内面を削るいわゆる布留式系の影響を受けた甕である。50・51・53は内湾する口縁部をもつものである。50・51は外面の横ハケメや内面のケズリなど同様の調整が行われるうえ、色調も明褐色系と似通っている。52・54・55は、口縁部が若干外反するものである。52は丁寧な調整が行われ、縦方向のケズリによって厚さが一定に保たれている。52・54

は外面に炭化物が厚く付着する。53は褐色を帯びてやや厚手の仕上がりだが、胴部は内外面ケズリで調整している。56・57はケズリが行われず、形態が類似するものであるがハケメも粗く粗雑な印象を受ける。頸部に接合痕を残す。

58は「く」の字口縁で外面に縦方向の細かいハケメが施される。59は台付甕の脚部である。内外面に粗いハケメが見られる。端部は面取りされている。60～62は端部が面取りされるもので外面にススが付着する。63は形態的には壺形にするべきか。内外面粗い調整で砂粒の移動が見られる。口径13.6cm、底径3.8cm、高さ18.8cmでほぼ完形に復元できた。Ｅ３－18・⑦層でまとまって出土した。

b）壺形土器（図版12～14）

64は広口壺で口縁端部は摘み上げられる。内外面ミガキで外面にはススが付着する。65は有段口縁の壺で外反して開く。口縁端部は丸く尖り気味である。大型壺の66は頸部下端に段部を作り板状工具で刺突を行う。調整は内外面ミガキで口縁部には擬凹脈が施される。67は広口壺である。受け口状の口縁部下端には板状工具による刺突文が施される。外面はミガキで赤色塗彩される。68～70は長頸壺の口縁部と思われる。71・72は小型壺である。72は外面を赤色塗彩する。73の有段口縁の壺には、擬凹線が施されるが幅が広く扁平で溝は極めて浅い。74は二重口縁壺で口縁部内外面に赤色塗彩を施す。頸部はハケメである。76は口縁部を折り返し側面に２本の粘土帯を貼り付けたもので、内外面ミガキで精巧なつくりである。東海地域の影響と思われる。78・79は長めの口縁部を持つ。79は横方向のミガキが施される。80は小型の丸底壺で完形品である。内外面に赤色塗彩が施され調整は丁寧なミガキである。81も同様に丸底壺と推定され口縁部は長めで内湾する。82・83は装飾壺の口縁部である。83は口縁部下位に沈線文が２条施される。断面は半円形で幅は２mmほどで細い。84は胴部突帯部分で凹線状のくぼみを作り、ヘラ状工具でキザミを入れる。85～88は内湾する長めの口縁部をもつ。85は頸部にハケメ、86～88は丁寧なミガキが施される。

89～91は全体の器形が分かるものである。いずれも口縁部が「く」の字形に屈曲するが、89は長めで外反し、90は短く開く。91はやや内湾気味で胴部は下膨れな印象である。内外面粗いハケメで胎土に海綿骨針を含む。92も「く」の字に屈曲するが、口縁端部は折り返して肥厚させている。

93～102は二重口縁壺である。93は、外見上は段部をつくるが内面にはほとんど段差が見られない。外面の調整は丁寧な横方向のミガキである。内面には焦げ跡が見える。94・95・98・99・102は外反が強く内面の段部はほとんど見られない。95は、口縁端部に板状工具による刺突文をめぐらす。口縁部はヨコナデ調整である。98は、破片が集中して出土しほぼ全形が分かった大型の壺である。Ｅ３－２・７で⑦′層出土である。口径18.7cm、底径７cm、球形で張りの強い胴部となる。103も同形の大型壺と思われる。どちらも勢いのあるハケメで入念に仕上げている。96・97は段部を明確に作るもので頸部も長めである。

c）器台（図版14～15）

104は弥生土器である。口縁部を欠くが屈曲部を肥厚させるもので、内外面を赤色塗彩している。色調は白色系で胎土も細かい。105は有段状の受け部で脚部に透かし孔をもつ。外面は細かいミガキが行われ、口縁部は斜め～横方向、脚部は上部から順に横・縦・斜め方向に施される。106は口縁部が大きく外反する有透器台で透かし孔をもつ。ミガキは横～縦方向に行われる。107～109は直線状に受け部が開くものである。107は脚部が若干内湾するもので、口径10.4cm、高さ10.6cm、脚径11cmを測る。脚部に透かし孔は見られない。受部孔は整形後貫通させるようである。108は内湾する受部と脚部をもち、透かし孔も存在する。入念にミガキが行われ光沢をもつ。109は低平な受部と「ハ」の字形に開く脚部を持ち透かし孔は小さめで

ある。110・111は内湾する受部をもち受部孔の処理も丁寧である。110は内外面赤色塗彩される。112は脚部を欠くが直線的に伸びる受部を持つ。調整は粗雑で砂粒の移動が顕著である。受部の穿孔も斜めに行われている。113・116・118は口縁端部が摘まれて尖り気味である。116は脚部径13cm、器高7.4cmで透かし孔が確認でき、外面は赤色塗彩される。114は直線的に受部が開き、脚部は筒状になる。受部孔は脚部を整形後穿孔したと見られるが脚部側では中心からずれている。115も同様な受部であるが受部孔は大きめである。117は受部が平坦で接合痕が見られることから装飾器台かと思われる。脚部には透かし孔も見られる。119は口縁端部が「L」字形になっている。受部孔は欠損して不明だが器形から器台とした。120～122は器台脚部で受部孔が確認できる。122には上下２段に透かし孔が確認できる。

d）高坏（図版15・16）

123は坏部が大きく身も深めな大型の高坏であるが、脚部はそれに対して低く小さめである。ほぼ全形が復元でき口径24.2cm、高さ14.1cm、脚部径11.2cmを測る。内外面ミガキ調整で赤色塗彩が施される。128も同様のものと推定されるが脚部付け根にヘラ状工具でキザミが入れられる。129は弥生時代後期後半に見られる高坏の棒状有段脚である。脚部はエンタシス状で段部上位に透かし孔が入る。外面は丁寧なミガキが施される。124は口縁部が大きく外反する。同じく後期後半と思われる125・126の坏部は立ち上がりがほぼ真上で、端部で短く開く。126は端部がヨコナデにより摘み上げられる。127は段部がほとんど形骸化したものであるが、外面に赤色塗彩が施される。130は脚部の端部で断面は三角形に肥厚している。131は外反して開く坏部で口縁端部内面には２条の擬凹線文がみられる。内外面ミガキ調整である。132は直線的に伸びる口縁部で脚部は若干内湾する。透かし穴は中位に施される。器壁は薄く丁寧なつくりである。口径19.7cm、高さ12.4cm、脚径13.5cmを測る。133は坏部内面に円形の窪みがある。内面はミガキである。134は坏部の径が8.4cmで小型の高坏である。135は小型高坏で口縁部は見かけ上、有段となっている。脚部に透かし孔はなくハケメ調整、口縁部はヨコナデである。

136～138は内湾する坏部をもつものである。136は暗茶色系を呈し、他のものと趣を異にしている。調整は内外面に入念なミガキが行われる。坏部の下部には稜が作られることから東海系の有稜高坏の流れをくむものであろうか。137も丁寧な磨きで、赤色塗彩を施される。138は非常に薄手のつくりである。139～144は脚部である。139は内湾するもので上部に透かし孔が見られる。140・141は逆への字形の脚部で、前者は外面赤彩・透かし孔が施される。いずれも端部を正確に面取りしている。142はミガキが施されるが粗雑で内面にはタール状の焦げ跡が見られる。143・144は脚部の裾が水平に広がる。144は小型高坏の脚部になろう。なお、145は壷の底部と思われ、底面には籾痕が確認される。

e）鉢形土器（図版16）

146は有段口縁を呈し、内外面に横方向のミガキが行われる。151は「く」の字形口縁だが調整は同様である。147は完形品で口径16.8cm、底径5.4cm、高さ11cmを測る。調整は外面がハケメ、内面はケズリである。外面にはススが付着している。148は台付の注口鉢で台部を除きほぼ完形である。口径14.2cmで内外面丁寧なハケメが施される。口縁部はヨコナデで整えている。149は有孔鉢で完形品である。口径16.5cm、高さ12.5cmである。粘土の継ぎ目を残し粗いハケメを施す。150は口縁部をわずかに折り返す。152はミニチュア土器で口径4.5cm、高さ3.2cm、底径２cmである。153は小型鉢で口径9.4cm、高さ4.4cm、底部は不明瞭で自立できない。154は内外面丁寧なミガキがされる。底部は丸底になると思われる。

(3) 古代の土器（図版17）

a）須恵器

無台坏（156・158～167） 坏のうち、高台を持たないもの。口径は11～13cmの範囲内である。径高指数（器高÷口径×100）でみると、25～28が多く、30以上は墨書土器の２点である。調整は回転ヘラ切りが多く切り離し後ナデ消すものもある。回転糸切りは見られない。底部から直線的に立ち上がるものと丸みを帯びて開くものとがある。

墨書土器（158～160） 無台坏のうち底面に墨書の認められるものである。158は「有」、159は「三」でそれぞれ墨痕の残りが良く容易に判読できる。160は墨痕の認められるもので、「正」であろうか。

坏蓋（168） 口縁部を欠くものでつまみはボタン状に中央がくぼむ。

有台坏（155・169・170・172・173・179） 全形を知りうるものはない。155は高台が開くタイプで接地面は内側にある。169・170は高台がやや内向きで接地する。口縁部片はほぼ同じ深さのものである。

甕（171） 口縁端部が垂れ下がるもので波状文の文様帯がある。

壷（157・174） 長頸壷の底部が出土している。157は底面が盛り上がり、高台が外に開くようである。

b）土師器

無台椀（175～177） 175はほぼ完形に近いもので口径16.2cm、底径6.4cm、高さ4.5cmの大型で径高指数は28である。底面は回転糸切り技法が見られ、切り離し後底部から体部下半にはロクロケズリを施す。内面は滑らかに磨かれている。これらは内面黒色土器の技法に見られるが黒色処理は行われていない。176は内面黒色土器で、内面は光沢をもっている。底部は欠損である。177は口径13.4cm、高さ４cm、底径７cmで径高指数は30である。底部は回転糸切りである。

鍋（178） 口縁部片が出土している。口縁部が肥厚し端部に面をもつ。

(4) 中世の陶器（図版17）

中世の陶器は、すべて包含層出土で破片資料が多い。

181～183は土師器皿である。小片のため正確な口径は特定できないが概ね14cm前後である。いずれも口縁部はナデにより調整される。185は珠洲甕で口縁部の断面は方形となる。タタキの筋は幅広である。184は同じく珠洲の底部である。

(5) 木製品（図版18・19）

木製品は⑤層及び泥炭層出土のものと⑦及び⑧層出土のものがあり、土器などの時代から古代以降とそれ以前のものに分けられる。187・190～193は前者でその他は後者となる。

鋤（２） １号土坑出土。長さ40.3cm、幅16.2cm、厚さ２cmを測る。形状は長台形で先端部と基部を削り整形している。

用途不明品（186・188～190・193） 186は幅５cm、長さ73.4cmの角材に１cm四方の穴を13個あけている。八嶋林遺跡Ⅰ地区より同様の破片が出土している、おおあしに類似する。188は長さ55.2cm、幅3.4cm、厚さ12cmの板材に両端に切り欠きと削りを入れている。形状は柄や把手に近い。189は幅7.6cmの板材の下端

を薄く削り、穴を４つあけている。鍬などの農工具であろうか。190は、本来は容器の底板であったと思われるが、表面には刃傷がいくつも見られることからまな板に再利用されたようである。さらに別用途に利用したらしく上端を削っている。193は用途不明品だがほぞを作っている。

柄杓柄（187） 長さ69.2㎝で握り部分を整形し差し込むほうを削り細くしている。

下駄歯（191・192） それぞれ使用痕があり、接地面には砂利が喰い込んでいる。191は歯のほうに切込みを入れ差し込むもの、192はほぞを１本つくるタイプである。

槽（194） 破片のため詳細は不明だが脚付きの槽であろうか。片側の角を丸くした脚部は２単位確認できる。高さ6.6㎝、身の深さ3.8㎝である。

底板（195） 組み合わせ式の箱形製品の底板と思われる。側板を差し込む窪みと結び孔が確認できる。

(6) 石器・石製品（図版20～22）

石鏃未製品（196・197） 196は横長の剥片を197は縦長の剥片を利用し両側縁に２次調整を行っている。

管玉関連製品（198～201） 石材が緑色凝灰岩であることから管玉製作工程を示す資料である。198・199は原石を調整した石核と見られる。200・201は原石から玉素材を打ち欠いた際の不要品・欠損品と思われる。200は本来、方形で薄い板状の剥片であったと推定される。以上の資料には擦切溝は確認できず古墳時代の玉作り素材と考えられる。

磨製石斧（202～206・208） 台形状の基部（202・203）と刃部（204～206）がある。204は丁寧に磨いて鋭利な刃先を作り出している。205は鑿形の細長いもので、中程に装着痕があり両面に摩擦面がみられる。208は長さ12.8㎝、幅8.1㎝、厚さ4.4㎝とやや大型品である。基部は敲打と打撃で剥離されている。中ほどに装着痕があり両面に摩滅部分がある。刃部も打撃によって細かな剥離が見られる。

打製石斧（207） 未製品と思われる。打面側を基部として両側から２回ほど調整を加えている。表面には自然面を残す。

用途不明品（209・211） 209は石包丁形を呈しているが、刃先は丸みを帯びている。全体を滑らかに磨いているが、砥石のような研磨による細かい筋は見られない。211は両端を欠損するが断面は円形で徐々に細くなっている。

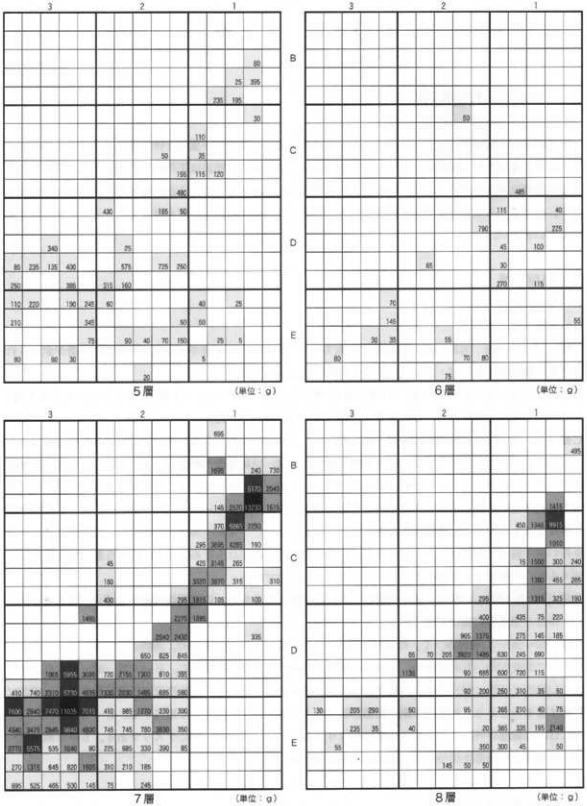
叩石・擦石（210・212～214） 210は長楕円形に磨かれているが半分を欠損する。側面と平坦部に敲打痕を残す。212・213は重なって出土している。顕著な使用痕は見当たらない擦り石として使用したと推定される。214はおむすび形の叩石で側面に大きな剥離が見られる。215は扁平な楕円形のもので平面中央に摩擦痕がみられる。

砥石（216・217） 216は角柱状の砥石で３面に使用痕が認められる。また、打撃作業の際に台座としても利用され、砥面中央部にはいくつかの窪みが見られる。217は板状の砂岩製で幅５㎜ほどの溝が何条もあることから玉砥石と思われる。溝の断面は平坦で一部重複する箇所もある。裏面は熱を受けて焦げている。

(7) 金属製品（図版22）

鉄鍋耳（218） 鍋の耳部分と思われる直径５㎜ほどの孔が空けられている。

銭貨（219） 通貨名は「皇宋通寶」で真書である。初鋳年は北宋の1038年である。裏面は無文である。



第6図　出土遺物重量分布図

第4章　まとめ

1．弥生・古墳時代

奈良崎遺跡本調査区では、当該期の土器が主体的に出土しているが遺物を伴う遺構は２基のみであり、量的にまとまった出土状態を見せるものの各時期の詳細な内容の検討は不可能である。ただ、県内における標識資料は着実に増えており、個々の土器を照らし合わせることで大まかな編年的位置付けは可能であろう。従って、本項ではまず形態的特徴から分類を行い、個々の出土位置も踏まえたうえでその時期を特定していきたい。

(1)　器種分類

a）甕形土器（第７図）

A類（12・13・44）　有段口縁で擬凹線文を施すもの。弥生時代後期後半の法仏・月影式に系譜が求められる。条が波板状になる12・13と、条が浅く平坦になる44がある。

B類（3・9～11・14・43・49）　有段口縁で口縁部が無文のものをＢ－１類（３・11・14・43）とした。受け口状口縁もＢ類に含め、これをＢ－２類（９・10・49）とした。

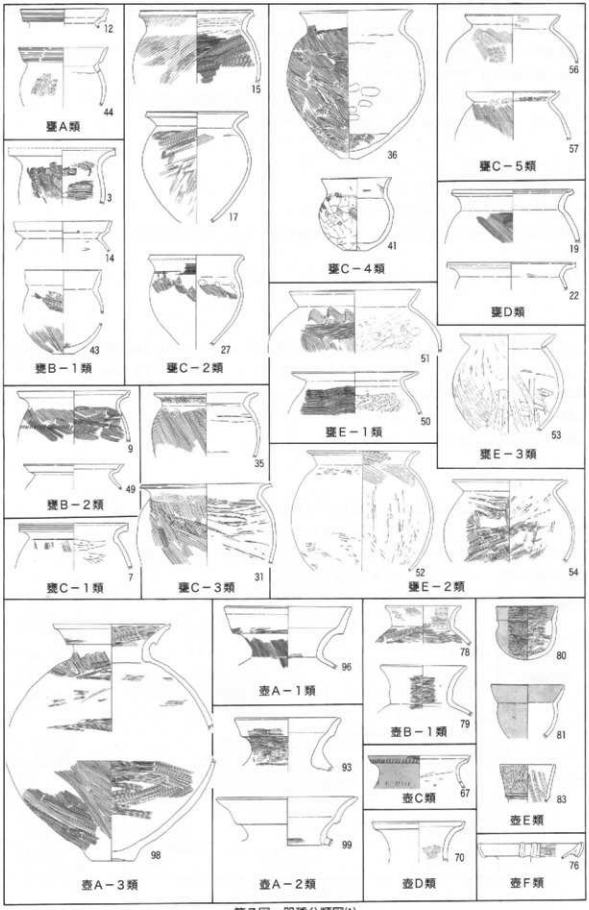
C類（5～8・15～18・21・23～42・56・57）　「く」の字形口縁となるもの。口縁端部の処理方法によってかなりのバラエティーに富む。Ｃ－１類（６～８）は、口縁端部の断面が「T」字形で２～３条の擬凹線文を施すものである。Ｃ－２類（５・15～18・21・23～30・60～62）は、口縁部をヨコナデによって面取りを行うもので摘み上げるものや垂下するものなどを含めた。Ｃ－３類（31～35・40）は、口縁部が強く外反するものである。端部は強調されないが面を取る。Ｃ－４類（36・41・42）は、口縁部にヨコナデを行い若干長めで端部は厚さが薄くなる。肩部が張り出し底部は小さめである。Ｃ－５類（56・57）は内湾する短い口縁部をもち外面は粗いハケメを加えるものである。

D類（19・20・22）　口縁部が途中で折れ「コ」の字形となるもの。口縁端部は摘み上げられ尖るものが多い。体部と頸部間の稜は明瞭である。

E類（50～55）　口縁部が「く」の字形に開き、内湾あるいは外反するもの。調整は外面がハケメ、内面がケズリで器壁が薄いものが多い。これらの特徴から畿内系土器と思われる。Ｅ－１類（50・51）は、内湾する口縁部で外面に横ハケメ、内面に斜めケズリを施すものである。口縁端部は正確に面を取り、内側に肥厚するものもある。田嶋氏分類〔田嶋1986〕のＩ１類・布留式傾向甕に相当する。Ｅ－２類（52・54・55）は、口縁部が外反するもので外面はケズリ又はハケメ、内面は一様にケズリである。Ｅ－３類（53）は、内湾する口縁部を持つもので端部は丸みを帯びる。

b）壺形土器（第７図）

A類（65・74・93～102）　口径15cm程度以上の中・大型品で、口縁部が有段となるもの。いわゆる二重口縁壺も含まれる。段部が明確なものをＡ－１類（96・97）、若干認められるものをＡ－２類（65・93・95・99～102）、外反が強い上に器壁が厚く外面のみ段となるものをＡ－３類（94・98）とした。


甕A類
甕B－1類
甕B－2類
甕C－1類
甕C－2類
甕C－3類
甕C－4類
甕C－5類
甕D類
甕E－1類
甕E－2類
甕E－3類
壺A－1類
壺A－2類
壺A－3類
壺B－1類
壺C類
壺D類
壺E類
壺F類

第７図　器種分類図(1)

B類（77～79・89～92）「く」の字形などの単純口縁のものを一括した。形態にばらつきがあるが、口縁部が長めで外反するものを便宜的にB－1類（78・79・89）とした。

C類（67・68・75） 広口で頸部が体部・口縁部に比べ細くくびれないもの。

D類（66・69・70） 頸部が長く伸びるいわゆる長頸壺。

E類（71～73・80～84） 口径10cm前後の小型の壺を一括し、台付装飾壺・細頸壺類も含めた。

F類（76） 東海系土器を一括した。口縁部側面に粘土隆帯を貼り付ける。

c）器台（第8図）

A類（105） 受部が有段状になるもの。

B類（110・111・113） 受部が浅身で内湾するもの。

C類（107～109・114～116・118・119） 受部が直線的に開くもの。脚部は内湾するものとハの字に開くものとがある。

D類（106・117） 受部側面にも透かし孔が開くもの。いわゆる有透器台。

d）高坏（第8図）

A類(123～131) 棒状有段脚となるものや坏部が直線的あるいは外反して開き外面に明確な稜をもつもので、法仏・月影式系譜のものである。脚部には透かし孔を持つ。赤色塗彩されるものが多い。

B類（136～138） 坏部が内湾するもの。深身のものと浅身のものがある。137は赤色塗彩される。

C類（132） 坏部断面が逆台形となり低平な脚部となるもの。脚部には透かし孔がある。

D類（134・135） 小型の高坏を一括した。

e）鉢（第8図）

A類（146） 有段口縁となるもの。内外面ミガキが施される。

B類（147・151・154）「く」の字形口縁となるもの。ミガキとハケメ調整のものがある。

C類（148～150） 体部からそのまま口縁部となるもの。注口鉢やいわゆる無頸鉢もこれに含める。

D類（152・153） 小型の鉢。ミニチュア土器も含める。

第8図　器種分類図(2)

(2) 編年的位置付け

a）出土土器の編年的位置付け

前項による分類から、奈良崎遺跡当該期の変遷案を既存の編年に拠りながら以下のように設定した。

1期 弥生時代後期後半を中心とし、北陸の法仏式に相当する。

甕の口縁部はヨコナデにより端部を強調する。C類の端部断面が三角形（7・18）や「T」の字形となるもの（6・8）や、A類の口縁部が有段で伸長するもの（12・13）、B類（9～11）が主体である。概して口縁から胴部上位までヨコナデを行い、それより下位はハケメとなる。この境に板状工具による刺突文が入るものが多いが、10のように櫛歯での施文も稀に見受けられる。底部まで残るものは僅かだが、胴部はそれほど張り出さず長胴形であると思われる。1号土坑出土の甕（3）や5・30もこの時期にあたるだろうか。高坏は、A類（125・129・130・131）とした坏部下位に稜を持ち、脚部が棒状有段となるものである。壺では今ひとつ不明だが小型壺を含め広口壺（67）や長頸壺（69・70）が主体となるだろう。器台（104）では破片1点のみであるが、内外面赤彩のもので裏山遺跡に類例がある。鉢では有段鉢が見られる時期であるが確認できなかった。147・148は当期の位置付けに不安が残り、1～2期の範囲で捉えておく。148の注口鉢は百両山・上の平遺跡で類例が確認される。

2期 弥生時代後期終末を中心とし、北陸の月影式に相当する。

出土例は僅かで内容に乏しい。越後における編年でも当期の後半は良好な資料が減少し、後の古墳時代に向けた集落再編の動きがあったと考えられる。

甕ではB類（14）、C類（15～17）が相当すると思われる。「く」の字形口縁で端部は、ヨコナデにより強調され角が尖る。これらは、口縁部形態や胴部の張り出しが比較的強いことから判断したが確証に欠ける。壺では直口の65・83が相当する。65は口縁部が外反する有段壺であるが、段部が不明瞭である。形態的には後続する3期でも同様なものが確認されるため、2～3期の範囲で捉えておく。

3期 古墳時代前期初頭を中心とし、坂井・川村編年Ⅱ－1・2期頃に相当する。

前段階の技法・器種が変容しながらも残存する一方、東海・畿内といった外来系土器が受容され新たに小型器台が出現する時期とされる。

甕はA類（44）・B類（43・49）・C類（24）・D類（19・20）がある。A類の擬凹線文は断面が平たく浅いものである。A・B類の口縁段部は内面で不明瞭となる。D類は口縁端部を上方に摘み上げる「コ」の字形口縁で、頸部は長めに伸び短く屈曲する。壺では65・73・80・83が相当すると思われる。高坏では坏部が大型で強く外反する123がこれに相当する。また、127・128など形の崩れた脚部も当期かと思われる。小型器台では105を当期とした。同時期とされる長岡市横山遺跡1号環濠（Ⅱ－1期）出土の小型器台と比べると、105の受部は外反しているが脚部は同様の形態をとり当期の範囲に収まると考える。また、鉢（151）も同遺構出土土器に類例が見られる。

4期 古墳時代前期前半を中心とし、坂井・川村編年Ⅱ－3・Ⅲ期頃に相当する。

東海系の小型器台が定着し在地的な変容を見せる。また、当期の後半（Ⅲ期ころ）から畿内的要素が強まり受容してゆく一方、北陸的な要素はほぼ消滅していく時期とされる。

甕では在来の「コ」の字形口縁甕D類（22）が見られる。口縁部は長めとなるが引き続き端部は尖り気

味である。50・51は畿内系のE類で、田嶋氏分類のⅠ$_1$類（調整分類BⅡa、いわゆる「布留傾向甕」）に当たる。漆町編年によれば$Ⅰ_1$類は同編年の7群に主体的な土器として「特定できる可能性が濃い」とされ、本遺跡例もほぼ同時期と考えられる。また、C－3類とした31～35・40は口縁部が強く外反し、胴部が強く張り出し球形となる。口縁端部は面を取るが強調されずやや丸みを帯びている。以上の点から、D・E類よりもやや古相と考える。

壺では在来系と思われる有段口縁壺（74・95）が相当する。東海地方の影響を受けた76は、緒立遺跡2号住居に類例がある。これらは当期の古相と考えられよう。また、大型の口縁をもつ96や畿内地方の影響と思われる二重口縁壺（99・100・102）は同一グリッドからの出土であり形態的にも似通っていて同時期の可能性が高い。これに隣接して出土した98は胴部が球胴となる。これらの二重口縁壺と小型丸底壺(81)を加えて、古相としたものよりやや新しい要素をもつものとして理解した。

器台では有透器台（106）、脚部が内湾傾向を示す107・108・121が相当すると思われる。有透器台はⅢ期を持って消失傾向にあるとされている。後者については脚部の形態から一応前期前半代としておく。

高坏のB類（136・137）は坏部が内湾する有稜高坏が祖形と思われるが、本例は坏底部が小さくなり僅かに稜を残す状態であることから当期に相当すると思われる。

5期　古墳時代前期後半を中心とする。坂井・川村編年Ⅳ期、漆町編年9群に相当する。

畿内系土器が定着し、小型精製器種の組成が確認される段階とされる。

甕ではC－2類（61・62）、C－4類（36・37・41・42）が相当する。C－4類の特徴として長めに外反した口縁部や胴部中位まで張り出すこと、先細りした底部を持つことが挙げられる。底部はケズリによって細く整形した後ハケメで調整する。

壺A類（94）は前段階の二重口縁壺の系譜だが、内面に段部がなく口縁端部のみ外反するなど形骸化が進んでいるため当期としておく。92は一般的ではないが山三賀Ⅱ遺跡SⅠ502A出土土器に確認できる。

高坏はB類（138）を当期としておく。器台では、受部が浅身で椀形を呈する110・111が相当しよう。

6期　古墳時代前期終末以降とし、漆町編年10～12群に相当する。

小型精製器種の組成が崩壊・衰退する段階とされるが、本遺跡では断片的である。

甕では粗雑な調整のもの（48・63）がある。共通して胎土に粗い砂礫が入り、ハケメにより砂粒の移動が顕著である。これらは他の土器とは明らかに様相が異なり系譜が不明であるが、前期終末以降の長胴化傾向のなかで捉えておきたい。内湾する口縁部の56・57も口頸部の接合が粗雑なものである。類例は山三賀Ⅱ遺跡のSⅠ124出土土器に見られることから中期初頭の可能性がある。大型の58も当期と思われる。

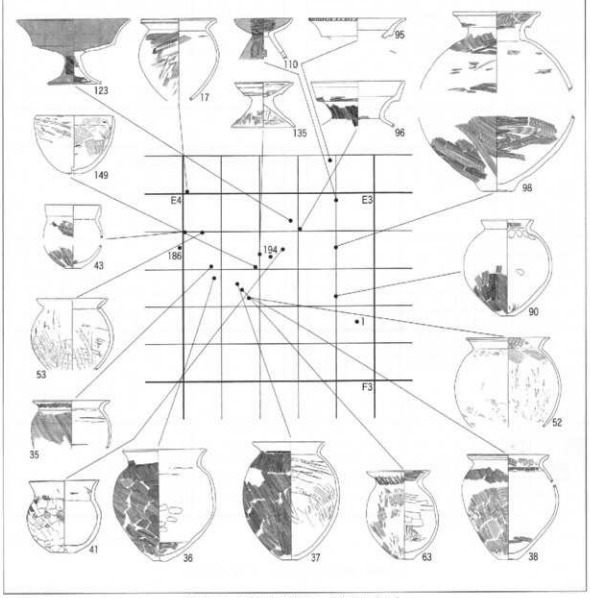
b）出土状況からみた妥当性

遺物は⑦・⑧層で特に高密度で出土したが、異なる層位間での接合もあり明確な時期差決定の判断材料にはならない。参考までに集中地点毎にどのような土器群が出土しているか出土位置図・分布図等を作成した（第6・9・10図）。遺物は地山の落ち込み際から出土しているが、その中でも大きくみて南北2つの集中地点（北側をa、南側をbとする）が存在することが分かる。南側集中域（E2・D2グリッド）では甕C・E類が相対的に多く出土状態も良好であった。方法論的に手順が逆になるが、変遷案に基づいて設定した土器についてその分布や出土状態はどうであるかを以下では検討してみたい。

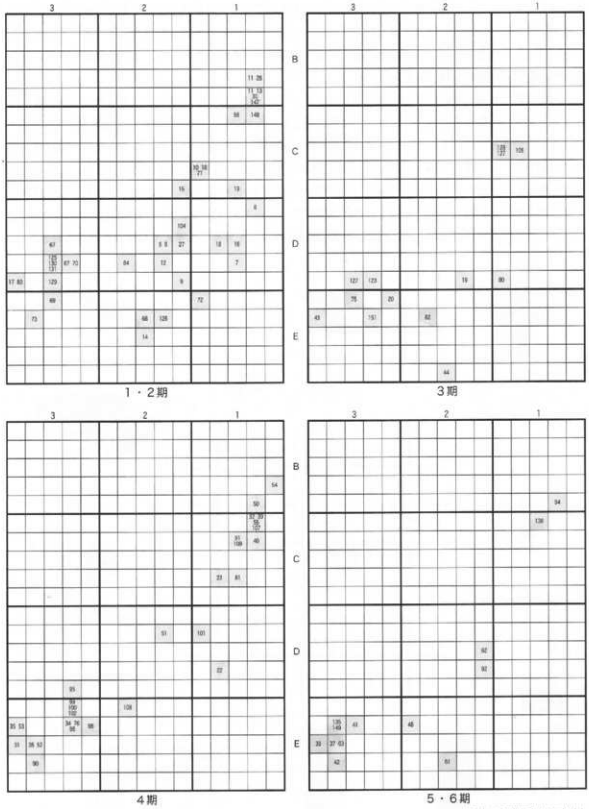
Ⅰ・2期とした土器は、いずれも集中地点の西側すなわち丘陵上部でのまとまりが見られ、これを根拠

の一つとした。ただ、全体で見れば山裾に沿って出土する状況から層位的なもので遺跡本体からの流れ込みの可能性が高い。これ以降は明確な規則性は見られないが、やはりａ・ｂ地点からまとまって出土している。特に集中地点ｂでは、ほぼ完全に復元可能な個体が幾つか出土している。この状況からみて、短い期間での廃棄行為が行われたと考える。

上記の状態で出土した遺物は第９図に示した。Ｅ３－12・18周辺の特に集中した地点では４期以降に設定したものが主体となっている。この中で時期を特定したものは76・98・99・100・102（４期）と36・37・41（５期）である。問題となる時期保留の土器は38・52・53・135・148である。この中で38・52は同一地点での出土で、一括性が高いと思われる。38は甕Ｃ類で形態的には在地的要素を持つ。また、土器の分布状況も総合して下限を４期と考えたい。52のＥ類は同形の53～55があるが、漆町編年ではＦ・Ｇ・Ｈ類として６群を中心に８群まで設定されている。本遺跡ではＥ－１類（50・51）が７群併行とされることから、53～55についてもほぼ同時期と考えたい。また、135・149は出土分布から考えて５期頃と考えておきたい。



第９図　遺物出土位置図（集中地点ｂ）



（数字は図版番号を表す）

第10図　遺物の出土範囲（弥生・古墳）

c）まとめと問題点

奈良崎遺跡の時期変遷案とその妥当性について形態的特徴と出土分布から検討した。この結果、大まかな時期的まとまりをもつ可能性が想定できた。ただ、今回は遺構一括土器が未検出のため個々の形態から時期を特定しているが、本来は器種組成面からの検討も必要不可欠である。時期決定の直接的な根拠は先学諸氏の土器編年に依拠しているところが大きいが、組成内容が把握できる基準資料との併行関係を考える必要があろう（註１）。

越後における弥生時代後期後半前後の編年は、現在までの到達点として滝沢氏が概括的に示されている〔滝沢2000〕。奈良崎１期の指標としては甕Ａ・Ｂ・Ｃ類、高坏Ａ類を挙げた。「甕の形態変化については未消化」とされるが、有段口縁甕のＡ（12・13）・Ｂ類（11）は口縁部が直立気味となりあまり発達しない。この特徴は近隣に位置する柏崎平野の戸口遺跡ＳＤ67出土土器（滝沢氏の２期古）に共通点を見出せる。ただ、技法的には甕口縁部・胴部の刺突文や櫛歯文様が施される点、（擬）凹線の条数が３条前後と少ない点は相対的に古い要素として考えられ、ある程度の時期幅が認められる。また、口縁部が殆ど外反しない高坏（125）についても同様に２期古相以前の要素と考えられる。

奈良崎２期は、月影式併行（滝沢氏の３・４期）であるが相対的に資料数が減少傾向にあり本遺跡でも同様の傾向が見られる。一般的には各器種の口縁部の伸長や鉢・高坏など精製器種の小型化が指標とされるが本遺跡ではこれに該当するものを見出せなかった。今後は甕Ａ類の評価に加え「く」の字口縁の分類とその形態変化の傾向を検討する必要がある。

奈良崎３期では甕Ａ類（44）・Ｂ類（43）・Ｄ類（19・20）、高坏Ａ類（123）などが存在する。坂井・川村編年Ⅱ－１期とされる緒立遺跡３号住居でも同様に前時期からの在地的要素を残す甕が出土している。同じく横山遺跡１号環濠出土例で123とほぼ同形態の高坏が出土している。

奈良崎４期では甕Ｅ類（50・51）・Ｃ－３類（31～35）、壺Ａ類（98・99・100・102）・Ｆ類（76）、小型丸底壺（81）などが指標となる。甕Ｅ類については前述の通り、田嶋氏分類のＩ$_1$類とするならば漆町編年７群に設定される。県内出土の布留甕は中郷村横引遺跡（４個体）・籠峰遺跡（２個体）、新井市上の平24号住居（１個体）、西山町高塩Ｂ遺跡（２個体）・加茂市丸潟遺跡（１個体）・塩沢町来清東遺跡（１個体）など上越地方を中心に分布する。ここで詳細な時期は論じ得ないが今後の資料の増加によりその波及ルートが明らかになるだろう。

奈良崎５期では前述の定義どおり、畿内系高坏・小型精製器種の確立を確認することは出来なかった。ただ、それに共伴する甕は山三賀ⅡＳＩ502Ａ（Ⅳ期）などに見られる通り、Ｃ－４類が主体となる。

奈良崎６期では甕48・63など粗雑な作りの土器を指標としたがこれらは前時期までの形態変化で追えるものではなく詳細な特定は出来ない。

以上、弥生後期後半～古墳時代前期の土器について設定を試みた。遺構一括資料が存在しないために器種組成から見た時期設定が不可能であり、恣意的な分類になった可能性もあるが基準資料との対比である程度の時期は特定できたと考える。

（註１）既存の編年との対応関係をまとめると以下のとおりとなろう。

奈良崎	滝沢 2001	坂井・川村 1993	田嶋　1986	春日 1994	他遺跡・遺構
１期	２期古				裏山４号住・11号土坑
	２期新				斐太２号住
２期	３期				斐太10号土坑
	４期	Ⅰ期			
３期		Ⅱ－１期	５群		緒立Ｂ３号住
		Ⅱ－２期	６群		
４期		Ⅱ－３期	７群	Ⅰ	緒立Ｂ２号住、一之口SK437
		Ⅲ期	８群	Ⅱ	山三賀ⅡSI1480、一之口SI233
５期		Ⅳ期	９群	Ⅲａ	山三賀ⅡSI502Ａ
６期			10群		
			11群	Ⅲｂ	
			12群	Ⅳ	

第３表　編年対応表

２．古代・中世

出土した遺物は土師器を若干含むが図化できたものの内、殆どが須恵器の坏類であった。出土分布に偏りは認められないうえ、良好な遺構出土遺物がないため詳細時期は不明である。ただ、佐渡小泊窯産と思われる須恵器が主体を占める事から概ね９世紀後半～末葉が中心と考えられる。このうち、無台坏の底部に墨書が認められた３点（158～160）は、いずれも意味不明な一字の墨書であった。158の「有」は、和島村八幡林遺跡Ⅰ地区出土の墨書土器群中に７点見つかっており、時期的に見て本遺跡のものとほぼ一致する。八幡林遺跡の墨書土器群では８世紀前葉～９世紀中葉の土器に書かれた「大領」・「群」・「大厨」など官衙的内容を表すものから、９世紀後葉以降増加する一字墨書に変化する傾向が指摘されている〔和島村　1996〕。この傾向から見ても、本遺跡の墨書土器は一般集落内における日常行事的な祭祀行為といった一現象であったと思われる。

古代の遺構としては１号井戸・１号掘立柱建物・１号ピット・２号ピットが相当するが、他の掘建柱建物や柱穴も該当する可能性はあろう。丘陵側が削平されていることもあって遺物・遺構の内容は不明な点が多いが、井戸を有していることから本調査区周辺に小規模ながらも集落があった可能性が高い。また、調査区西側のⅡ区からも遺物がある程度出土していることから〔和島村教委　2001〕、丘陵部一帯の比較的平坦な場所に広がっている可能性もあろう。

中世の遺物としては、珠洲陶器片・銭貨（皇宋通寶）・中世土師器皿・下駄歯などの木製品である。古代の遺物同様、包含層出土で分布に偏りはない。丘陵部では中世の山城が検出されており、そこからの流れ込みであろう。本遺跡の北東には隣接した状態で大武遺跡が存在し、水田跡・井戸などが検出されており微高地が確認されているが〔春日ほか　2001〕、今回の調査区では当該期の遺構は明確に確認できなかった。上層は削平された影響もあるが遺構・遺物量が少ないことと大武遺跡の調査成果を引用すると、中世の集落はやはり大武遺跡周辺の微高地に存在していたと思われる。

要　約

1．奈良崎遺跡は、新潟県三島郡和島村大字島崎2148ほかに所在する。遺跡は郷本川沿いの北東方向に突き出た丘陵裾部に立地し、現況は水田などである。

2．発掘調査は、二級河川郷本川河川改修工事に伴い平成12年５月11日～11月30日まで行われた。調査面積は延べ約2000㎡である。

3．調査の結果、掘立柱建物6棟、弥生後期～古墳時代前期の土坑２基、平安時代の井戸１基、ピット多数が検出された。遺物は古墳時代前期を中心に弥生時代後期・古代・中世の土器のほか、鋤・槽・下駄歯など木製品も出土している。

4．弥生・古墳時代の遺物は２基の土坑出土遺物のほかは包含層出土であるが、集中して出土し遺存状態がよいものもあることから廃棄行為に伴う可能性がある。土器はその形態的特徴から北陸系・畿内系・東海系などの影響下で成立したものである。

5．古代の遺物では無台坏が主体的に出土しているが、そのうち３点には一字墨書が認められた。形態的特徴から９世紀後半～末葉のものと思われる。

参考文献

甘粕　健　1993　「弊越地方の前期古墳」『弊越地方における古墳文化形成過程の研究』「弊越地方における古墳文化形成過程の研究」研究グループ

甘粕　健　1993　『越後山谷古墳』新潟県巻町教育委員会　新潟大学考古学研究室

伊藤秀和ほか　2000　『丸潟・新通遺跡』加茂市教育委員会・山武考古学研究所

岡本郁栄　1999　「序章第1節　新潟県の地形概観」『新潟県の考古学』新潟県考古学会　高志書院

尾崎高宏ほか　2001　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第107集　正尺Ａ遺跡』新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団

小野　昭ほか　1982　『大沢遺跡・Ⅱ』新潟大学考古学研究室

荒木勇次　1994　「山谷古墳」『巻町史』資料編１考古　新潟県巻町

荒木勇次　1994　「大沢遺跡Ｂ地区」『巻町史』資料編１考古　新潟県巻町

春日真実　1999　「第３章４－２　木器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会　高志書院

春日真実ほか　2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集　大武遺跡Ⅰ（中世編）』新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2001　「新潟県大洞原Ｃ遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」『研究紀要』第３号　財新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子正典ほか　1999　「第３章２－３　弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会　高志書院

金子正典　1999　「経塚山遺跡」『新潟県三条市　内野出遺跡　経塚山遺跡　市内発掘調査報告書』三条市教育委員会

川村浩司　1993　「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』新潟大学環日本海地域比較史研究会

川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相　―関川右岸下流域を中心に―」『上越市史研究』第５号　上越市

北村　亮ほか　1983　『緒立遺跡発掘調査報告書』黒埼町教育委員会
小池邦明・藤塚　明　1993　『新潟市的場遺跡　的場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
小池義人　2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集　裏山遺跡』新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
坂井秀弥　1989　「第Ⅳ章　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集　山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
坂井秀弥・川村浩司　1993　「古墳出現前後における越後の土器様相―越後・会津・能登―」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』研究グループ
鈴木俊成ほか　1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
関　雅之　1999　『葛塚遺跡　新潟県豊栄市葛塚遺跡発掘調査報告』豊栄市教育委員会
滝沢規朗　2000　「新潟県における弥生後期の土器編年」『第９回　東日本埋蔵文化財研究会　東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
田嶋明人　1986　「考察―漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
出越茂和　1995　「上荒屋遺跡Ⅰ」金沢市教育委員会
栃木英道　1995　『谷内・杉谷遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　『東日本における古墳出現過程の再検討』
三ツ井朋子ほか　1997　『大洞原Ｃ遺跡』新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉岡康暢　1983　『日本海の土器・陶磁器』（古代編）　人類史叢書　六興出版
和島村　1996　『和島村史』資料編Ⅰ　自然・原始古代・中世・文化財
和島村　1997　『和島村史』通史編
和島村教育委員会　1992　『和島村埋蔵文化財調査報告書第１集　八幡林遺跡』
和島村教育委員会　1993　『和島村埋蔵文化財調査報告書第２集　八幡林遺跡』
和島村教育委員会　1994　『和島村埋蔵文化財調査報告書第３集　八幡林遺跡』
和島村教育委員会　1998　『和島村埋蔵文化財調査報告書第７集　下ノ西遺跡』
和島村教育委員会　1999　『和島村埋蔵文化財調査報告書第８集　下ノ西遺跡Ⅱ』
和島村教育委員会　2000　『和島村埋蔵文化財調査報告書第９集　下ノ西遺跡Ⅲ』
和島村教育委員会　2001　『和島村埋蔵文化財調査報告書第10集　奈良崎遺跡』
渡辺ますみ　1994　『緒立Ｃ遺跡発掘調査報告書』　黒埼町教育委員会

遺物観察表

（凡例）

1．時期は以下の略語で示した。
　時代　弥：弥生時代　古：古墳時代
　時期　前：前期　中：中期　後：後期

2．法量は以下の略語で示した。
　口：口径　底：底径　高：器高　長：残存長　幅：残存幅　厚：厚さ

3．胎土は以下の略語で示した。
　長：長石　石：石英　雲：雲石　海：海綿骨針　砂（2mm以下）　礫：（2mm以上）

4．残存率は土器実測図作成時に復元の根拠となった部位の残り具合を示す。

1．弥生・古墳時代の土器

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時期	器種	胎土	法量（cm）	残存率	焼成	内面色調	外面色調	備考
1	133	E-3-4	⑦	弥生前期	甕	英　砂礫	口119.4　底9.6	1/3	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	
2	198	SK1			鋤		長40.3　幅16.25　厚2					
3	88	SK1		弥後～古前	甕	海　長　英	口117	1/3	良	褐色	—	外面スス
4	137	SK2		弥後～古前？	甕	長	底5.6	1/2	並	暗茶褐色	—	外面炭化物
5	29	D-2-8	⑧	弥後	甕				良	茶褐色	茶褐色	外面炭化物
6	31	D-2-8	⑧	弥後	甕	海　英　長	口118	3/4	良	茶褐色	茶褐色	外面スス
7	35	D-1-14	⑧	弥後	甕		口117.4	1/6	良	淡褐色	淡褐色	外面スス
8	36	D-1-6	⑧	弥後	甕	礫	口18.8	細片	不良	茶褐色	茶褐色	外面スス
9	115	D-2-5	⑦′	弥後	甕	長　砂	口18	1/4	良	暗褐色	—	外面炭化物
10	14	C-1-24	⑦	弥後	甕		口15.6	細片	良	暗褐色	暗褐色	外面炭化物
11	90	B-1-9・10	⑦～⑧	弥後	甕	礫	口15.6	1/2	並	淡橙褐色	淡橙褐色	
12	72	D-2-9	⑦	弥後	甕	礫	口14	1/4	良	淡褐色	淡褐色	
13	102	B-1-10	⑧	弥後	甕	海　長　英	口17.6	1/4	並	淡褐色	淡褐色	
14	27	E-2-13	⑦′	弥後～古前	甕	海　英	口15.6	1/6	不良	暗褐色	暗褐色	
15	68	C-2-5・B-1-5	⑦	弥後～古前	甕	海　礫	口17.8	3/4	良	褐色	褐色	
16	38	C-1-24	⑦	弥後～古前	甕	英　長	口15.4	3/4	良	淡褐色	淡褐色	
17	64	D-3-25	⑥～⑦上	弥後～古前	甕	海	口16		並	褐色	灰褐色	外面スス
18	83	D-1-13・18	⑧	古前	甕	英　長	口18.6	1/3	不良	暗褐色	暗褐色	
19	13	C-1-15/D-2-10	⑧/⑦	古前	甕	長	口19	2/3	並	黒色	黒色	
20	17	E-3-1	⑦	弥後～古前	甕	長	口117	1/2	並	灰褐色	灰褐色	
21	97	D-2-1	⑦	弥後～古前	甕	英　長	口15.6	1/3	並	淡褐色	—	外面炭化物
22	24	D-1-19	⑧′上	古前	甕	英　長	口20.4	1/3	並	褐色	—	外面炭化物
23	39	C-1-7	⑧	古前	甕	英　長	口19	1/4	良	褐色	—	外面スス
24		B-1-10	⑦	古前	甕	英　長	口117	1/2	良	灰褐色	灰褐色	外面スス
25		D-3-9	⑦	古前	甕	礫	口15.2	1/2	良	淡褐色	淡褐色	外面スス

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時期	器種	胎土	法量(cm)	残存率	焼成	内面色調	外面色調	備考
26		D-3-10		古前	甕	英長	口18	1/3	並	桃	桃	外面スス
27	153	D-2-3	⑧	弥後？	甕	海英長	口14.8	2/3	並	褐色	褐色	外面スス
28	57	B-1-9	⑦	弥後？	甕	海長	口12.2	1/5	並	灰褐色	黒	
29	112	E-3-24	⑦′	弥後～古前	甕	英礫	口15	1/6	並	黒灰色	—	外面スス
30	143	B-1-10	⑧′	古前	甕		口15.8		並	淡褐色	褐色	外面スス
31	81	E-3-23	⑦′	古前	甕	海英長	口20.6	1/3	良	暗褐色	暗褐色	
32	49	C-1-6	⑧	古前	甕	英	口18	1/5	良	淡褐色	—	外面炭化物
33	48	C-1-19	⑦	古前	甕		口20.2	1/5	並	褐色	—	外面炭化物
34	45	E-3-7	⑦′	古前	甕		口14.4	1/4	並	暗茶	暗茶	
35	80	E-3-22	⑦	古前	甕	英長	口16.6	1/2	並	褐色	—	外面スス
36	139	E-3-23	⑦上	古前	甕		口18　底2.5		並	黒茶	黒茶	外面スス
37	152	E-3-18	⑦′	古前	甕	英	口15.6　底3.5　高25.1		良	暗茶色	暗茶色	外面炭化物
38	145	E-3-18	⑦′	古前	甕		口17.4　底4		並	茶褐色	茶褐色	外面スス底部内コゲ
39	23	C-1-6	⑧′	古前	甕	英礫	口14.4		並	淡褐色	淡褐色	
40	10	C-1-7	⑧	古前	甕	英	口14.2	1/2	良	暗茶褐色	—	外面炭化物
41	6	E-3-12	⑦上	古前	甕		口11.2　底3.8　高11.7	完形	良	暗茶褐色	暗茶褐色	外面スス
42	123	E-3-19	⑦′	古前	甕		口12.1　底1.6　高12.5		並	褐色		外面炭化物
43	74	E-3-22	⑦′	古前	甕	英輝	口12　底3.8		良	褐色	褐色	
44	71	E-2-15	⑦′	弥後～古前	甕	長	口14.2	1/2	並	暗褐色	—	外面炭化物
45	70	E-2-18	⑦′	弥後？	甕	海	口13.4	1/5	並	暗褐色	暗褐色	
46	26	D-1-16	⑧		甕	礫	口15.6	1/5	並	焦茶	—	外面炭化物
47	47	C-1-19	⑦	弥後～古前	甕	海	口13	1/6	並	茶褐色	黒色	
48	96	E-2-22	⑦		甕	英長	口14.2		並	淡褐色	淡褐色	
49	62	E-3-6	⑦	弥後～古前	甕		口16	1/5	並	暗茶褐色	暗茶褐色	外面炭化物
50	56	B-1-10	⑧	古前	甕	英	口20	1/3	良	明褐色	明褐色	外面スス
51	43	D-2-7	⑦	古前	甕	砂	口21	1/5	良	淡褐色	淡褐色	外面スス
52	101	E-3-18	⑦′	古前	甕	英輝	口18		良	暗褐色	暗褐色	外面炭化物
53	136	E-3-22	⑦′	古前	甕	英長	口15		良	褐色	褐色	
54	173	B-1-4	⑦	古前	甕	英礫	口18.2	4/5	良	褐色	—	外面炭化物
55	32	C-1-6	⑧	古前	甕	英	口17		良	淡褐色	淡褐色	外面炭化物
56		B-1-5	⑦	古前	甕	英長	口15.4	1/4	並	暗褐色	暗褐色	外面スス
57	144	B-1-9	⑦	古前	甕	英	口15	1/5	並	淡黄白	灰色	
58		D-3-20	⑦	古前	甕	英長	口24	1/6	並	褐色	褐色	

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時期	器種	胎土	法量(cm)	残存率	焼成	内面色調	外面色調	備考
59	147	B-1-10	⑦′	古前	甕		台9.6		良	淡黄褐色	淡黄褐色	
60	52	C-1-19	⑦		甕	英 長	口16.6	細片	良	淡褐色	—	外面炭化物
61	28	E-2-14	⑧′	古前	甕		口15.2	細片	良	暗茶褐色	暗茶褐色	外面スス
62	114	D-2-3	⑧	古前	甕		口20.4	1/4	並	暗茶褐色	—	外面炭化物
63	126	E-3-18	⑦		甕	英	口13.6 底3.8 高18.8		不良	暗褐色	暗褐色	
64		D-3-9	⑦	弥後?	壺	英 長	口22	1/6	並	褐色	暗褐色	外面スス
65		C-1-24	⑦	古前?	壺	英	口15		良	淡褐色	淡褐色	
66	94	C-1-11	⑧	弥後?	壺	英 礫	口28.8	細片	不良	黒色	茶褐色	
67	67	D-3-13・9	⑤・⑦	弥後	壺	海	口16.2	細片	良	灰褐色	淡黄褐色	外面赤彩
68	60	E-2-12	⑦	弥後	壺	海	口15.4	細片	良	淡褐色	暗褐色	
69	119	E-3-11	⑦	弥後	壺		口14	細片	並	褐色	褐色	外面スス
70	138	D-3-9	⑦	弥後～古前	壺		口14.8	細片	良	橙褐色	橙褐色	
71	15	C-1-24	⑦	弥後	壺		口11.4	細片	良	褐色	褐色	
72	78	E-1-21	⑦′	弥後?	壺		口10.8	細片	良	褐色	褐色	外面赤彩
73	118	E-3-17	⑦′	弥後～古前	壺		口9.6	細片	不良	淡黄土色	淡黄土色	
74	76	E-1-21	⑧	古前	壺	長	口17.2		不良	暗褐色	暗褐色	外面赤彩
75	120	E-3-11	⑦上	弥後～古前	壺		口17	細片	並	明褐色	明褐色	
76	135	E-3-7	⑦	古前	壺	長	口16	細片	良	褐色	褐色	
77	95	B-1-10	⑧	古前?	壺	英 礫	口16		不良	淡褐色	淡褐色	
78	8	C-1-14	⑦上	古前?	壺	長	口12		良	褐色	褐色	
79	87	B-1-10	⑧	古前?	壺	輝	口14		不良	褐色	褐色	
80	3	D-1-25	⑦	古前	壺		口10 高8.5	完形	良	褐色	褐色	内外赤彩
81	21	C-1-19・14	⑦・⑧	古前	壺		口11.8		良	茶褐色	茶褐色	内外赤彩
82	154	E-2-17	⑦	古前?	壺		口9	6/1	良	褐色	茶褐色	外面赤彩?
83	65	E-3-12/D-3-25	⑦′/⑦上	弥後～古前	壺	英 長	口9		良	褐色	褐色	
84	73	D-2-19	⑦	弥後～古前	壺		胴15.4	細片	良	灰褐色	灰褐色	
85		E-3-7		古前	壺	英 赤	口13.4	1/4	並	褐色	褐色	
86		D-2-3	⑦	古前	壺	砂 長	口10.4		良	褐色	黒色	
87		C-1-18	⑦	古前	壺	長	口8.6		良	淡褐色	淡褐色	
88		E-3-22	⑦	古前	壺	英 長	口11	1/3	並	茶褐色	茶褐色	
89	63	C-1-24	⑦		壺		口16 底6		良	淡褐色	淡褐色	
90	150	E-3-19	⑦′	古前	壺		口11.3 底3 高15.7		良	褐色	褐色	
91	54	C-1-12	⑦	古前	壺	海	口13.2 底5.4		不良	灰褐色	灰褐色	

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時期	器種	胎土	法量(cm)	残存率	焼成	内面色調	外面色調	備考
92	125	D-2-4	⑧		壷	長	口19.6		並	暗褐色	暗褐色	
93	9	C-1-10	⑦	弥後～古前	壷	長	口16.9		良	茶褐色	茶褐色	
94	151	B-1-10	⑦	古前	壷	礫	口15.8		不良	淡黄橙色	黒灰色	
95	66	D-3-10	⑦	古前	壷	英 礫	口20.7		良	橙色	橙色	
96	44	E-3-6・11	⑦上	古前	壷	長	口20.2		良	暗褐色	暗褐色	
97	103	C-1-11	⑦′	古前	壷		口21.6	1/5	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
98	134	E-3-2・7	⑦′	古前	壷	長 礫	口18.7 底7		並	褐色	褐色	
99	124	E-3-6	⑦	古前	壷	英 長	口22.4		不良	淡褐色	褐色	
100	122	E-3-6	⑦上	古前	壷		口20		並	淡褐色	淡褐色	
101	34	D-1-22	⑦	古前	壷	長	口18		不良	黒灰色	淡黄褐色	
102	121	E-3-6	⑦	古前	壷	長	口20	1/6	良	淡褐色	淡褐色	
103	141	B-1-10	⑦		壷		底7.8		並	暗茶褐色	暗茶褐色	
104	77	D-2-2	⑦	弥後？	器台				良	淡褐色	淡褐色	内外赤彩
105	41	C-1-18	⑦	古前	器台	海 輝 長	口19		良	黒茶	黒茶	
106	140	E-2-11	⑦	古前	器台	長	口22.2		並	褐色	褐色	透孔4
107	7	C-1-6	⑧	古前	器台	英 長	口10.4 脚11 高10.6		並	橙色	橙色	
108	58	E-2-16	⑦	古前	器台	英	口18.8 脚11.2 高9.1		不良	黒灰色	黒灰色	
109	51	C-1-12	⑦	古前	器台	英 長	口10.2	1/2	並	淡茶	淡茶	
110	16	E-3-7	⑦	古前	器台	英	口19.2		良	褐色	褐色	内外赤彩
111	89	B-1-10	⑧	古前	器台	英 礫	口10.2		良	褐色	褐色	
112	33	D-1-22	⑦	古前	器台	長	口18		良	褐色	褐色	
113		E-3-16	⑥～⑦	古前	器台		口19		並	淡褐色	淡褐色	
114		C-1-10	⑧	古前	器台	長	口10.2		良	褐色	褐色	
115		B-1-5	⑦	古前	器台	英 長 赤	口11.2		並	褐色	褐色	
116		D-2-19	⑦	古前	器台	長	脚13 高7.4		並	淡橙	淡橙	外面赤彩
117		E-3-24	⑦	古前	器台	骨 英 長			並	黄褐色	黄褐色	
118		D-2-14	⑦	古前	器台		口19		並	灰褐色	灰褐色	
119		E-3-2	⑦′	古前	器台	長		細片	不良	焦げ茶	焦げ茶	
120		D-1-22		古前	器台	長 輝	脚11.4		不良	赤褐色	赤褐色	
121	79	D-2-2	⑦	古前	器台	英	脚13.2		良	褐色	褐色	
122		E-3-7	⑦′	古前	器台	長 輝			並	暗褐色	暗褐色	
123	102	D-3-10	⑦	弥後～古前	高坏		口24.2 脚11.2 高14.1	1/2	良	淡黄褐色	淡黄褐色	内外赤彩
124	40	C-1-6	⑧	弥後～古前	高坏	英	口18	1/3	不良	黄土色	黄土色	

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時期	器種	胎土	法量（cm）	残存率	焼成	内面色調	外面色調	備考
125	166	D-3-14	⑦	弥後	高坏	長	口20.4	1/6	並	黒/褐色	黒/褐色	
126	69	E-2-7	⑦	弥後	高坏	海 英	口17.4 底4	細片	良	暗褐色	暗褐色	
127	128	D-3-15/C-1-23	⑥〜⑦上/⑦	古前	高坏	英	脚15.8	3/4	良	淡褐色	淡褐色	
128	127	C-1-23	⑦	弥後〜古前	高坏	長	脚13.4		良	淡褐色	淡褐色	内外赤彩
129	86	D-3-15	⑦	弥後	高坏	長			良	淡褐色	淡褐色	骨針
130	167	D-3-14	⑦	弥後	高坏		脚22.8	細片	並	褐色	黒灰	
131	168	D-3-14	⑦	弥後	高坏		口23.8	1/6	良	黒/褐色	褐色	
132	146	C-1-6/B-1-10	⑧/⑦	古前	高坏		口19.7 脚13.5 高12.4		並	暗褐色	暗褐色	
133		C-1-23	⑦	古前	高坏				良	焦げ茶	暗褐色	
134	25	D-1-21	⑦	古前？	高坏	長	口9.4	細片	良	黄土色	黄土色	
135	5	E-3-17	⑦上	古前	高坏	長	口9.9 脚10.2 高7.2		並	茶色	茶色	
136	12	C-1-6	⑧	古前	高坏	長	口18.8		良	焦茶	焦茶	
137	42	C-1-6	⑧	古前	高坏	英 砂	口16.8		並	淡褐色	淡褐色	内外赤彩
138	142	C-1-11	⑦	古前	高坏		口20	2/3	並	淡褐色	淡褐色	
139		E-3-7	⑦	古前	高坏	長			並	茶褐色	茶褐色	
140		E-3-11	⑦上	古前	高坏？		脚12		並	褐色	褐色	外面赤彩
141		C-1-18	⑦	古前	高坏？	長	脚11.8		良	褐色	褐色	
142	53	C-1-13	⑧		高坏	砂			並	淡褐色	淡褐色	
143		C-1-19	⑦	古前	高坏	長			良	褐色	褐色	
144		C-1-6	⑧	古前	高坏	英 輝	脚13	細片	並	灰黄褐色	灰黄褐色	
145	84	D-1-7	⑦		底部	英 長	底7.8		並	茶褐色	茶褐色	底面刷痕
146	75	E-3-22	⑦′	弥後〜古前	鉢	長 礫	口10	1/5	良	褐色	褐色	
147	113	B-1-10	⑧	古前？	鉢	英	口16.8 底部5.4 高11	完形	並	黒茶色	黒色	外面スス？
148	11	C-1-6	⑦′	弥後？	鉢	長	口14.2		不良	淡褐色	淡褐色	
149	4	E-3-23	⑦′	古前	鉢	英 長	口16.5 高12.5	完形	並	暗茶色	暗茶色	
150	61	E-3-23	⑦′		鉢	英	口10.2 底5.2 高9.7					
151	93	E-3-7	⑦′	古前？	鉢	輝	口24		良	褐色	褐色	
152	50	C-1-19	⑦		鉢		口14.5 底2 高3.2		良	褐色	褐色	
153	22	C-1-19	⑦	古前？	鉢		口9.4 高4.4		良	茶褐色	茶褐色	
154		C-1-5	⑧	古前	鉢	英	口14.8		良	暗褐色	暗褐色	

2．古代・中世の遺物

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時期	器種	胎土	法量（cm）	残存率	焼成	内面色調	外面色調	備考	調整等
155	170	S E3上			有台坏			細片		青灰色	青灰色		
156	169	S E3上			坏	小泊	口11.2　底8　高3.4	1/6		暗青灰色	暗青灰色	径高指数30	回転ヘラ切り
157	171	S E3上/D-1-25	⑥		壺					明灰色	明灰色		
158	1	D-2-1	⑥		無台坏	小泊	口12.2　底8　高3.6	完形	軟	灰黄色	灰黄色	墨書「有」径高指数30	回転ヘラ切り後ナデ消し
159	91	C-1-19	⑤		有台坏		口11.6　底3.2　高4.1	3/1				墨書「三」径高指数35	
160	110	D-1-24	⑥		無台坏		口12.6　底8.8　高3.2	1/3	堅	暗灰色	暗灰色	墨痕　径高指数25	
161	92	D-1-21	⑥		無台坏	小泊	口13　底9.2　高2.9	1/5	並	青灰色	青灰色	径高指数22	回転ヘラ切り
162	82	C-2-5	⑤		無台坏	小泊	口12　底7.4　高3	1/2	堅	青灰色	青灰色	径高指数25	回転ヘラ切り
163	18	D-1-13	⑥		無台坏	小泊	口12.6　底8.2　高3.4	1/6	並	暗青灰色	暗青灰色	径高指数27	回転ヘラ切り
164	19	C-1-18	⑦		無台坏	小泊	口12　底7　高3.4		堅	明青灰色	明青灰色	径高指数28	回転ヘラ切り
165	129	D-3-5・9・24	⑤・⑥		無台坏		口13　底7.8　高3.4	完形	並	青灰色	灰茶褐色	径高指数36　酸化還元成	回転ヘラ切り後ナデ消し
166	37	C-1-24	⑦		無台坏	小泊	口13　底9.8　高3.2	3/4	堅	暗青灰色	暗青灰色	径高指数25	
167	155	D-3-9	⑦		無台坏	小泊	口13	細片	軟	明青灰色	明青灰色		
168	99	E-3-6	⑤		蓋	小泊			並	明灰色	明灰色		
169	98	未注記			有台坏		底6	1/2	並	青灰色	青灰色		底部付近ロクロヘラ削り
170	156	E-3-16	⑤		有台坏	小泊	底9	細片	並	青灰色	青灰色		
171	111	E-1-21	⑤		甕				堅	暗灰色	暗灰色		
172	130	D-3-3	②		有台坏	長	口14.4	細片	並	明灰色	明灰色		
173	132	D-2-2	⑥		有台坏	長	口14.2	細片	並	明灰色	明灰色		
174	131	E-3-2	⑥		壺		底10	細片	堅	暗灰色	暗灰色		
175	2	D-1-7	⑥		無台碗		口16.2　底6.4　高4.5	完形	並	暗茶色	暗茶色	径高指数28	
176	59	E-2-21	⑦		坏		口14.8	1/3	並	黒色	黄褐色	内面黒色処理	
177	20	D-2-2	⑥		無台坏		口13.4　底7　高4		並	淡桃色	淡桃色	径高指数30	回転糸切り
178	180	D-2-2	⑤		鍋	長	口35.6	細片	並	暗橙色	暗橙色	外面スス	
179	145	Pit4			碗	小泊	口14			明灰白色	明灰白色		
180	149	Pit4			底部		底4.6		並	橙色	橙色		
181	100	E-3-2	⑤		土師器皿		口6.4	細片	並	黄褐色	黄褐色		
182	158	未注記			土師器皿		口14.4	細片	良	黄白色	黄白色		
183	159	未注記			土師器皿		口14	細片	良	黄白色	黄白色		
184	172	E-2-3	⑤		珠洲甕		底14	細片	堅	暗灰色	暗灰色		
185	117	B-3-14	⑤		珠洲甕			細片	堅	暗灰色	暗灰色		

3．木製品

図版No.	整理No.	出土位置	層位	時代	種別	法量（cm）	備考
186	187	E-4-2	⑦		用途不明	長73.4　幅5　厚2	方形孔13個
187	188	D-1-13	⑥	中世？	柄杓柄	長69.2　幅2	
188	194	C-1-7	⑦′		柄・把手？	長55.2　幅3.4　厚1.2	
189	190	E-3-18	⑦′		用途不明	長28.4　幅7.6　厚1.2	
190	191	E-3-14	⑦′		用途不明	長12.4　幅5.4　厚1	
191	189	D-1	④下	中世？	下駄歯	長10.4　幅14.6　厚1.6	接地面に砂利
192	193	E-2-2	⑤	中世？	下駄歯	長7.5　幅14.2　厚2.9	接地面に砂利
193	192	E-1-24	⑤		用途不明	長8　幅7.4　厚3.8	
194	195	E-3-12	⑦′	古墳？	脚付槽？	長39.6　幅10　高さ6.6	脚部２単位残存
195		E-2-1	⑦′		底板	長38.5　幅12　厚1.4	

4．石器・石製品・金属製品

図版No.	整理No.	出土位置	層位	種別	材質	法量（cm）	備考
196	181	C-1-24	⑥	石鏃未製品	頁岩	長4.9　幅3　厚1.5	
197	178	E-2-13	⑤	石鏃未製品	頁岩	長5　幅1.6　厚0.6	
198	179	E-3-21	⑤	管玉関連遺物	緑色凝灰岩	長5　幅5.1　厚2.9	
199	186	E-2-24	⑤	管玉関連遺物	緑色凝灰岩	長4.2　幅4.2　厚1.8	
200	182	E-3-7	⑦	管玉関連遺物	緑色凝灰岩	長2.1　幅2.2　厚1.5	
201	197	E-3-2	⑥	管玉関連遺物	緑色凝灰岩	長2.3　幅1.8　厚1.7	
202	196	E-2-16	⑤	磨製石斧		長5　幅4　厚1.7	刃部欠損
203	106	D-2-6	⑧	磨製石斧		長4.6　幅3.9　厚2.7	刃部欠損
204	183	E-2-23	⑦	磨製石斧		長4.5　幅4.3　厚1.8	基部欠損
205	107	E-3-11	⑦′	磨製石斧	安山岩	長8.2　幅3.9　厚2.6	基部欠損
206	184	E-3-21	⑥～⑦	磨製石斧		長5.1　幅4.9　厚2.6	基部欠損
207	174	未注記		石斧未製品		長12.4　幅5.1　厚1.5	
208	177	C-1-11	⑧	磨製石斧		長13　幅8.1　厚4.4	
209	108	E-2-23	⑥	用途不明		長8　幅4.1　厚1.5	
210	105	C-2-8	⑤	叩石	花崗岩	長8.6　幅8.5　厚3.7	1/2欠損
211	161	B-1-2	⑧	用途不明		長11.1　幅2.4　厚2	欠損
212	163	C-1-25	⑧	擦石	安山岩	長8.3　幅7.7　厚4.1	
213	164	C-1-25	⑧	擦石	安山岩	長9.2　幅7.6　厚5	

図版No.	整理No.	出土位置	層位	種別	材質	法量(cm)	備考
214	176	E-3-6	⑦	擦石	安山岩	長8.5　幅9.3　厚6.8	
215	176	E-3-6	⑦	擦石	安山岩	長8　幅9.5　厚6.7	
216	185	D-2-14	⑦	砥石	凝灰岩	長16.8　幅4.9　厚5.2	
217	175	D-2-7	⑧	玉砥石	砂岩	長9.2　幅13.5　厚2.6	裏面被熱
218	109	E-1-13	⑤	鍋耳？		厚0.6	
219		B-1-17	②	銭貨		直径25　厚0.2	皇宋通寶

図　　版

凡例

（遺物実測図）

1．スクリーントーン表示の内容は以下のとおりである。

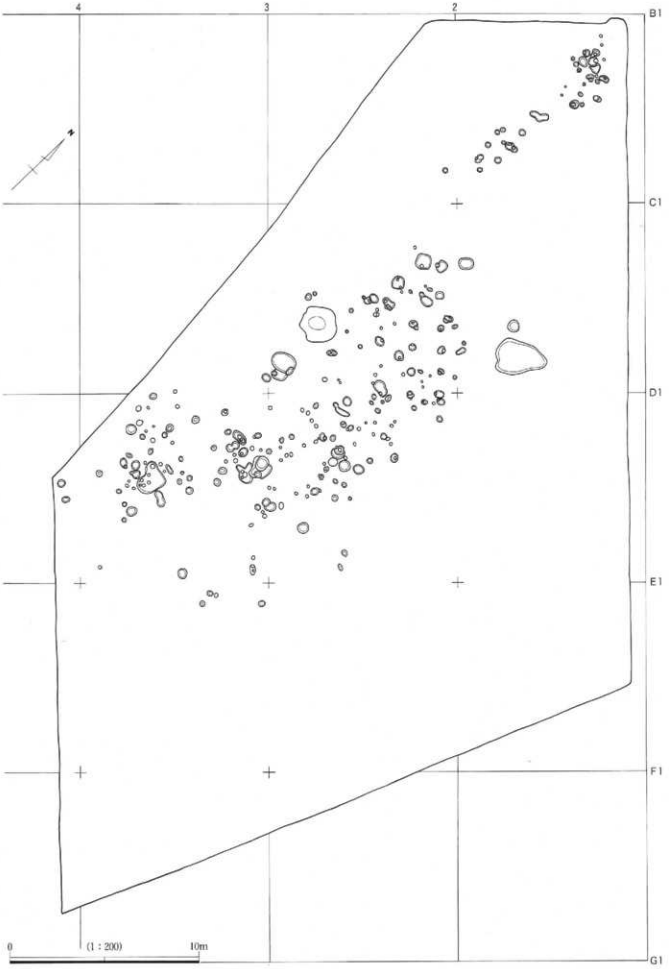
赤彩　　焦げ跡

墨色処理

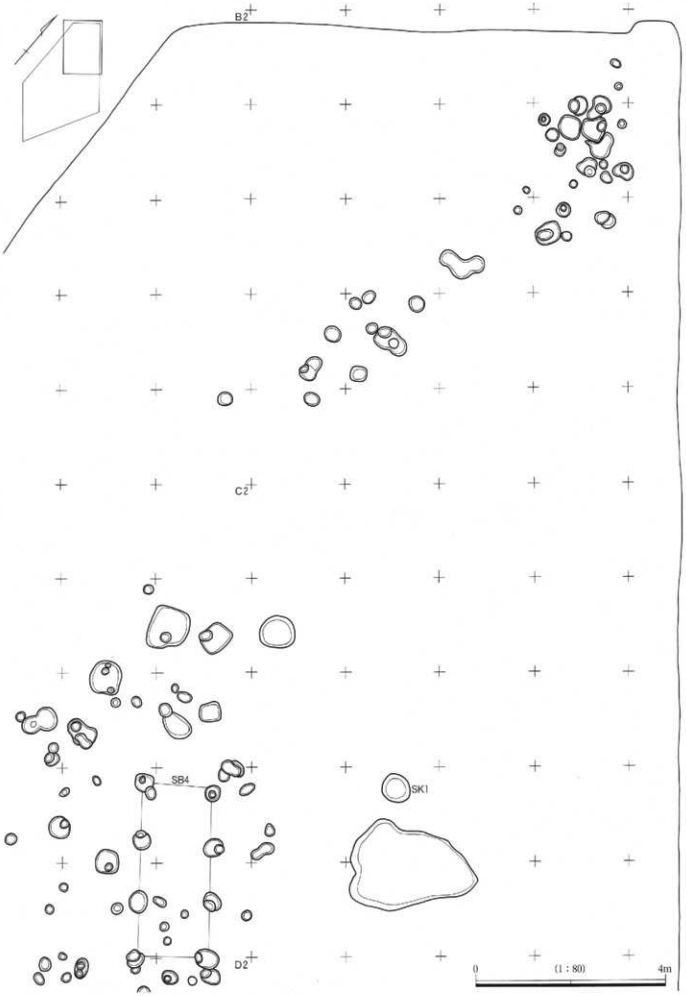
2．須恵器・珠洲系陶器の断面図は黒塗りで示した。

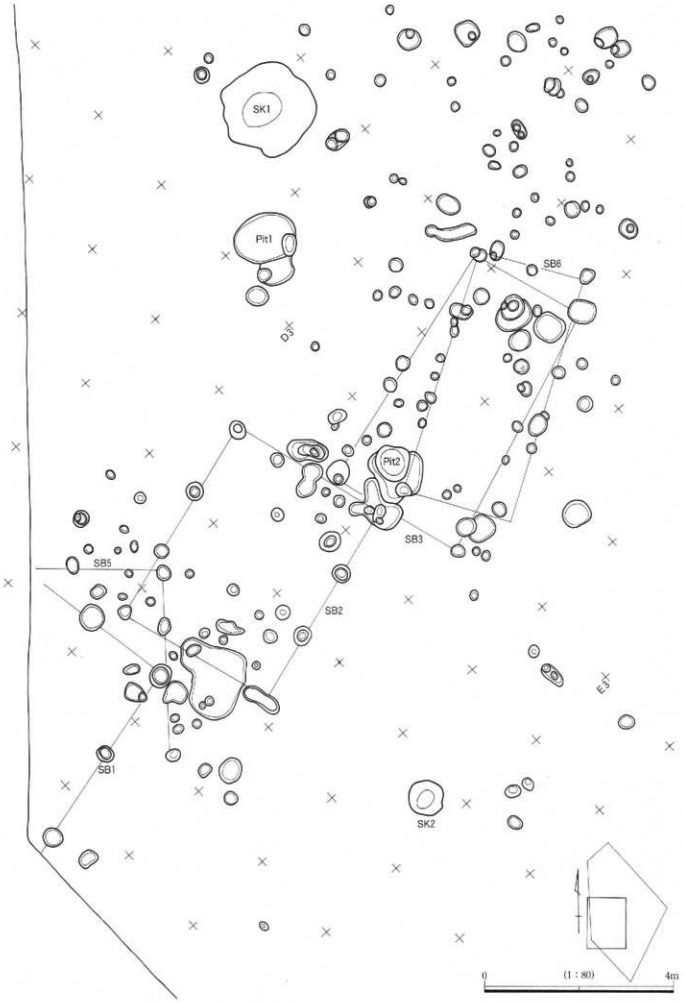
（遺物写真）

1．基本的に実測図とほぼ同一の縮尺率であるが、細かなもの等は1/2もしくは任意のものもある。
　この場合のみ縮尺率を表した。


4
3
2
B1
C1
D1
E1
F1
G1
0
(1：200)
10m

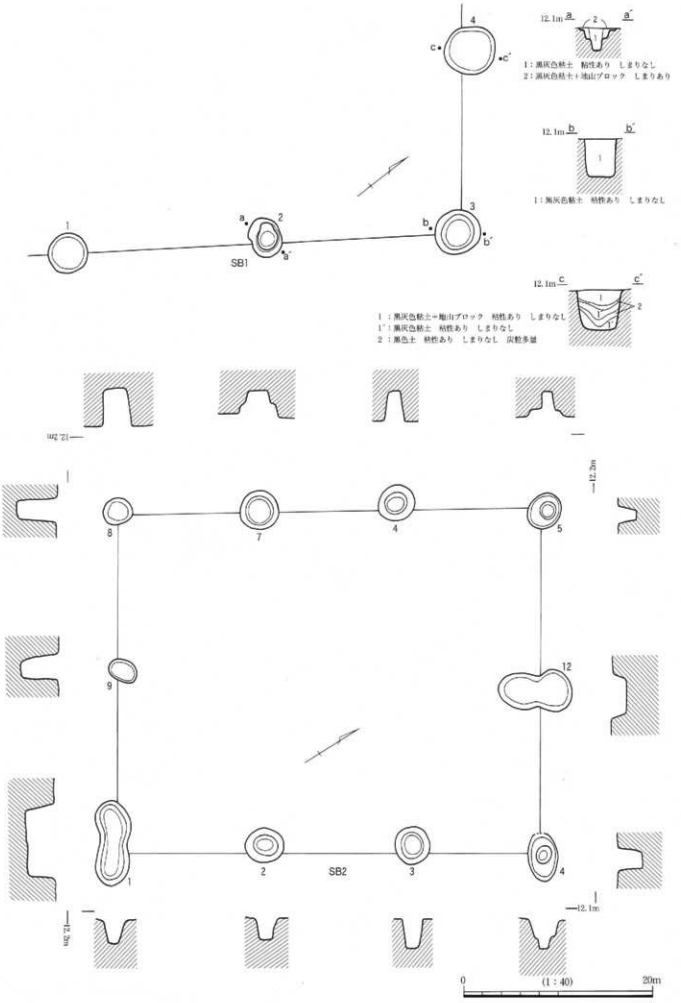
遺構実測図(1)

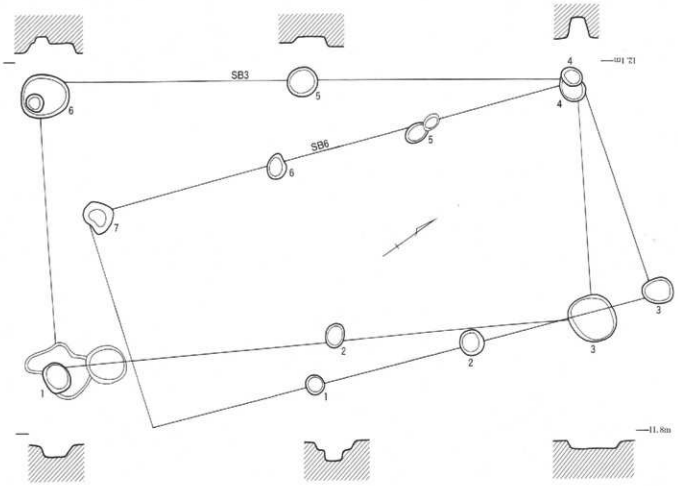


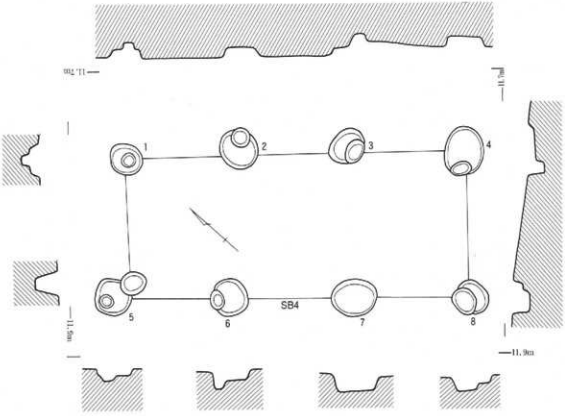

SK1
Pit1
SB6
D-3
Pit2
SB3
SB5
SB2
E-3
SB1
SK2
0
(1 : 80)
4m

図版4

遺構個別実測図（SB1・SB2）

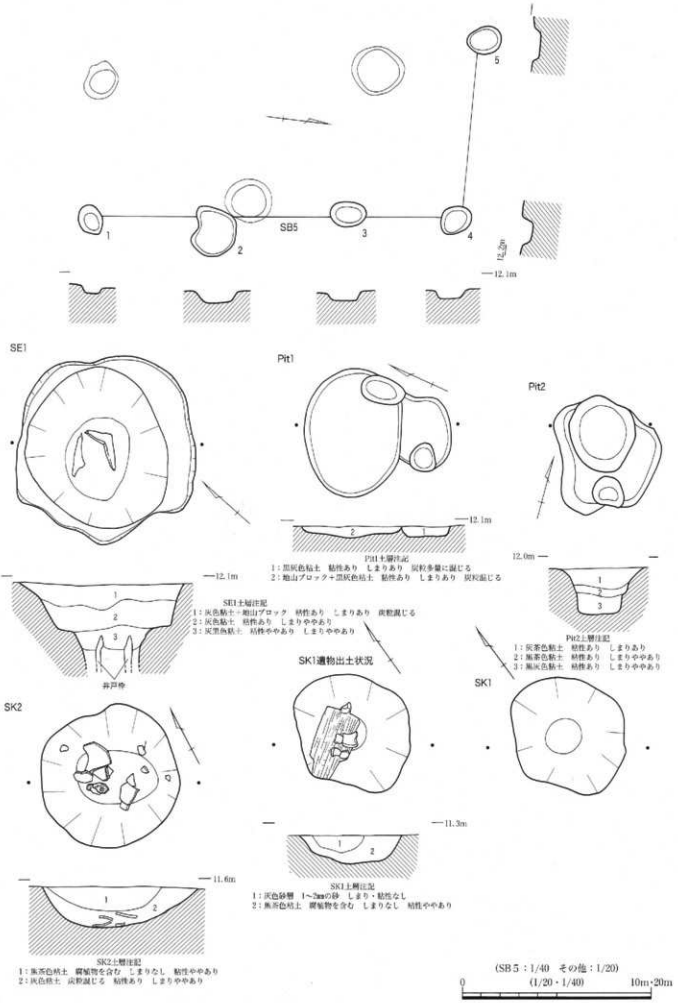


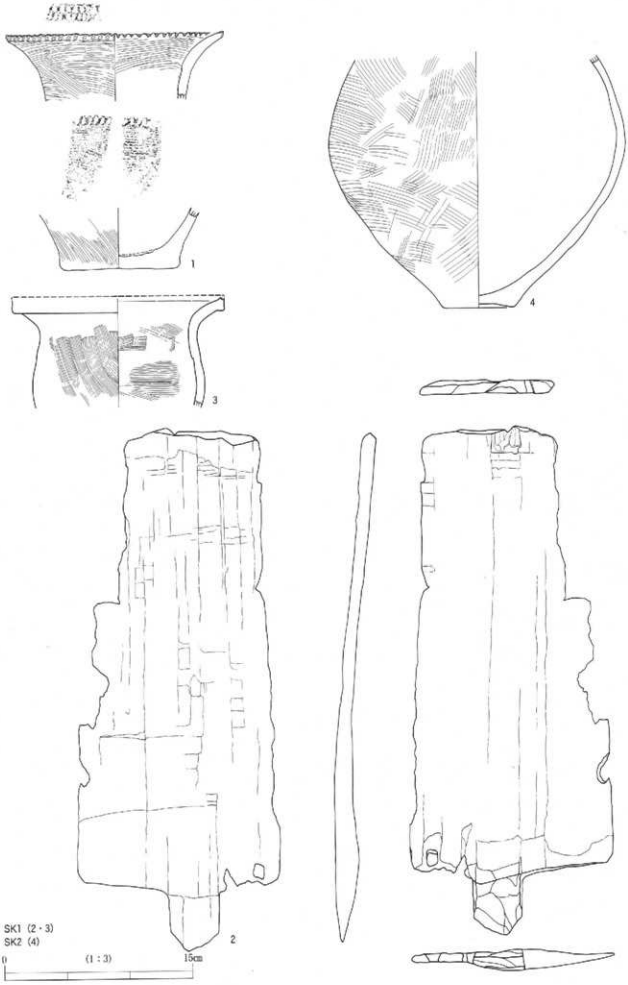


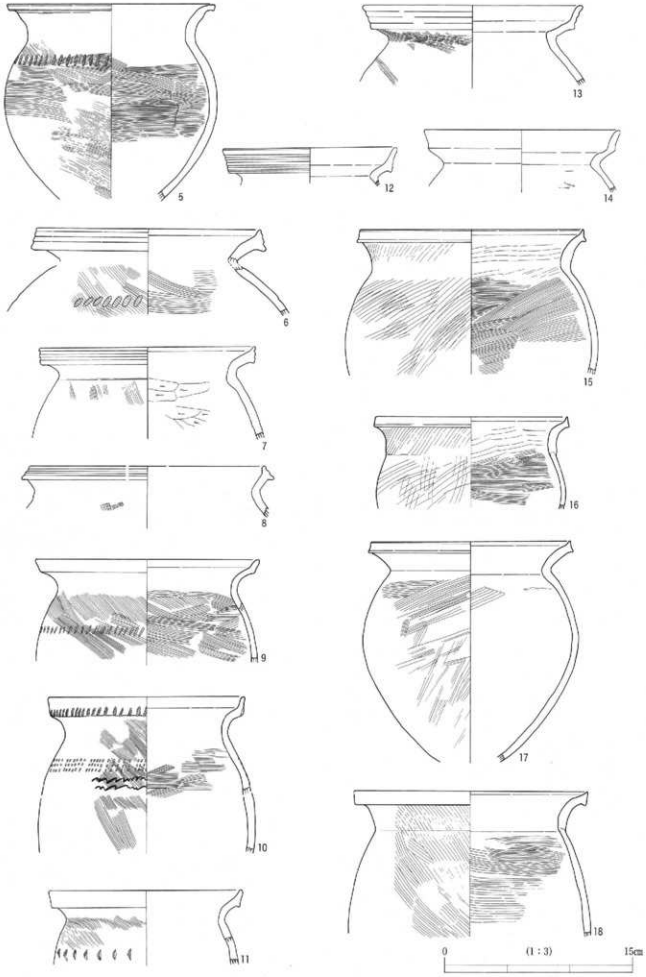


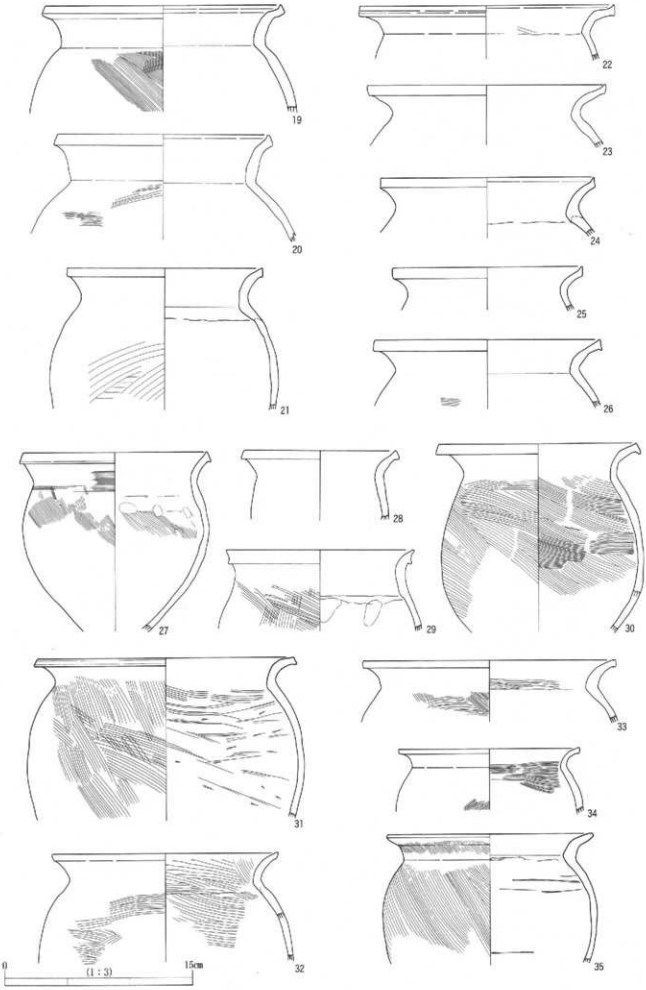
0　(1：40)　20m

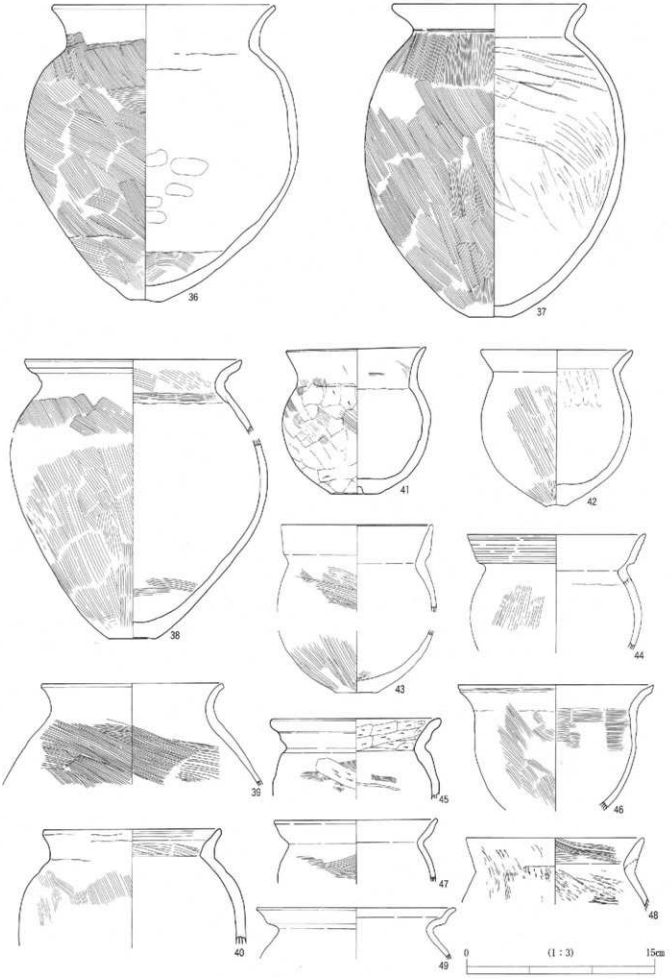
遺構個別実測図（SB5・SE1・Pit1・Pit2・SK1・SK2）

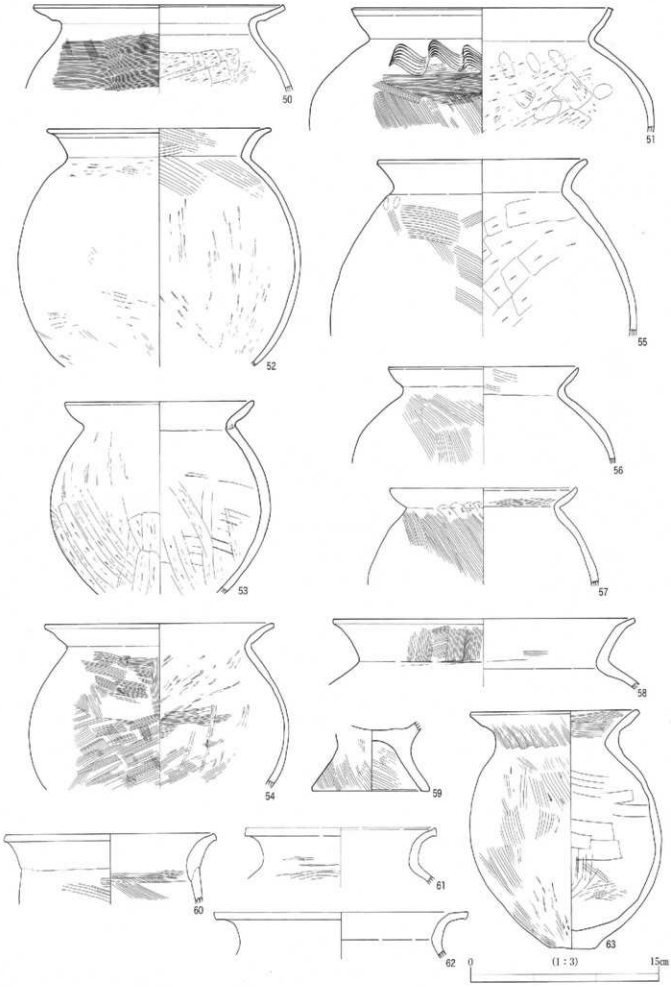


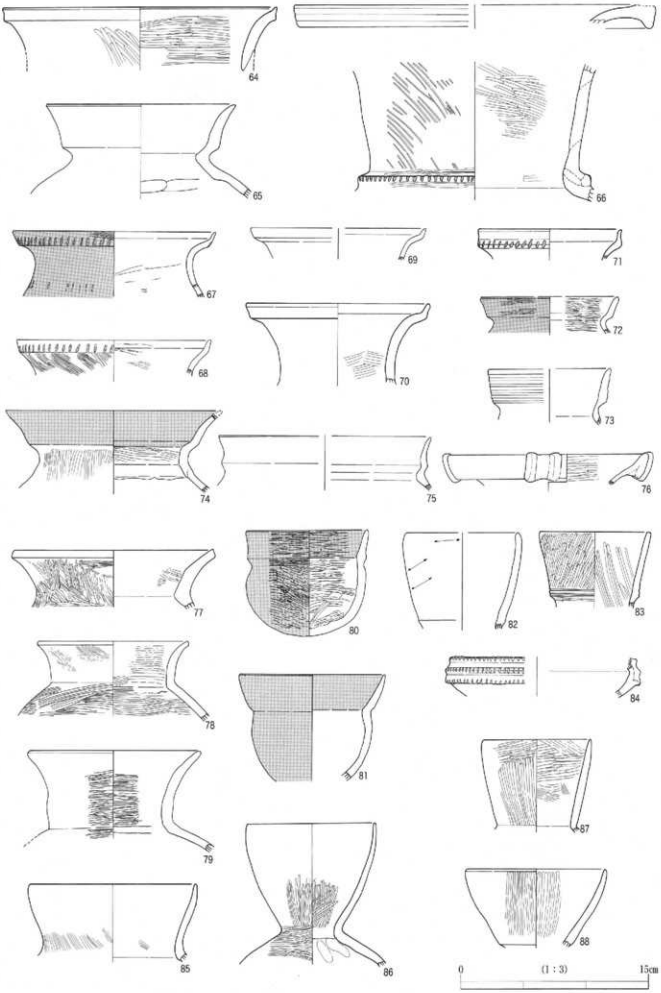

1
2
3
4
SK1 (2・3)
SK2 (4)
0
(1：3)
15cm

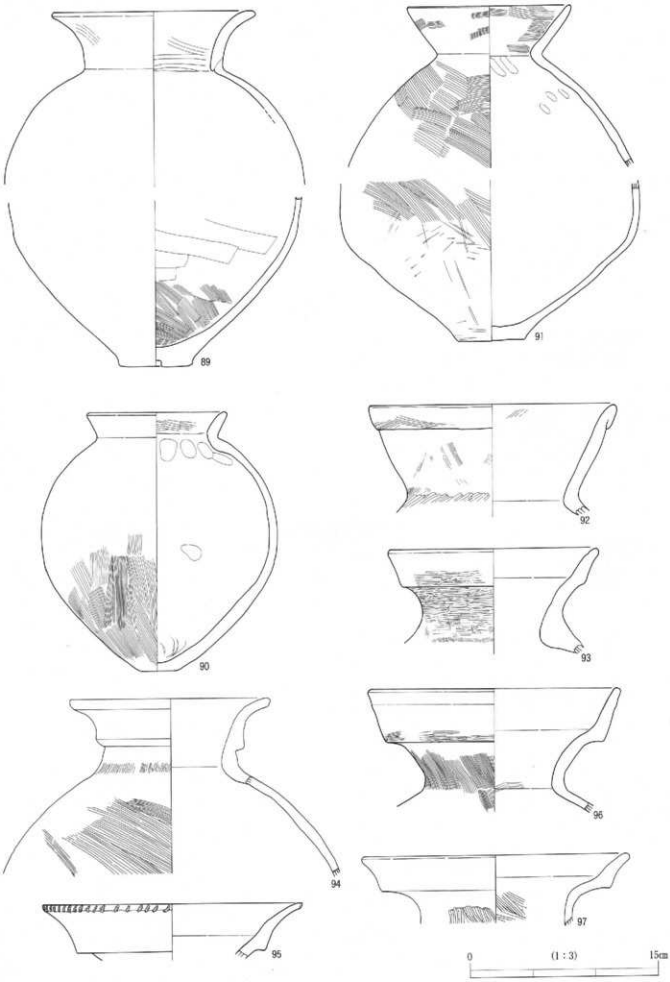

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
(1:3)
15cm

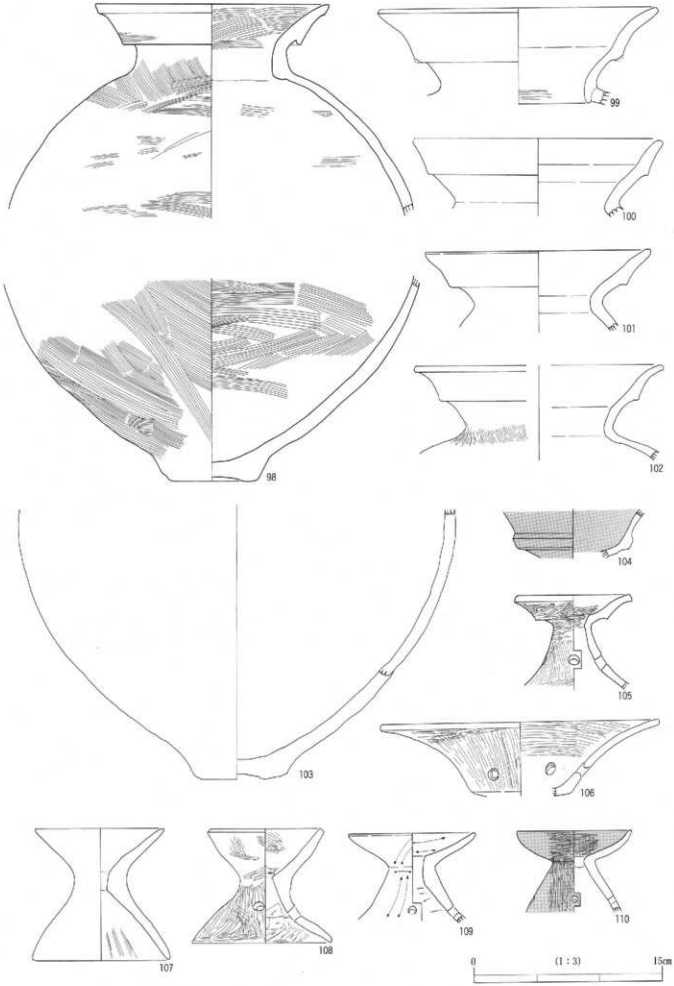

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
15cm
(1:3)


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
(1 : 3)
15cm

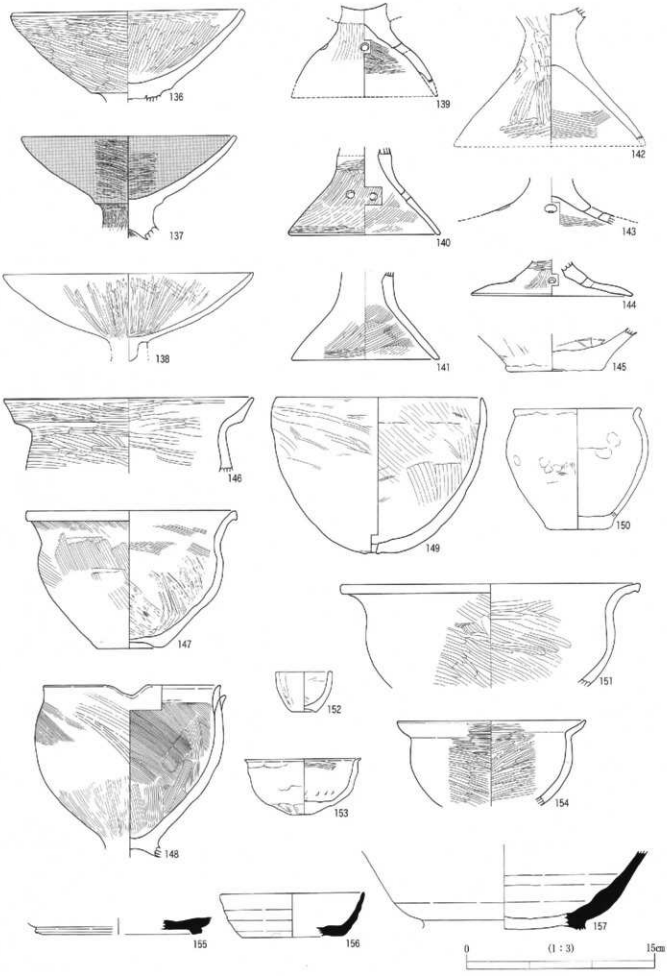

50
51
52
55
56
53
57
54
58
59
60
61
62
63
0
(1：3)
15cm

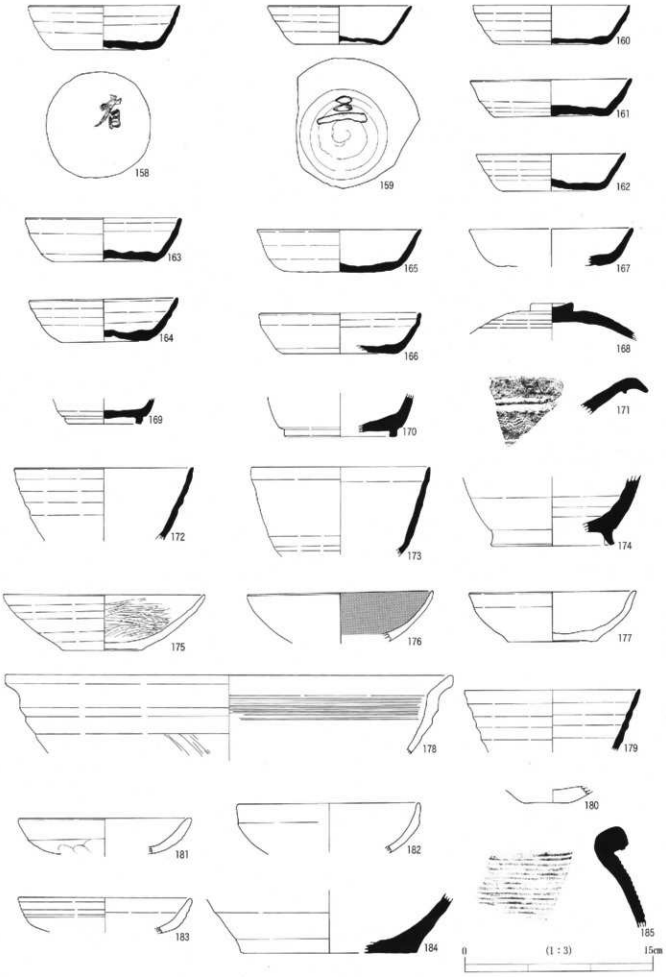

64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
(1 : 3)
15cm

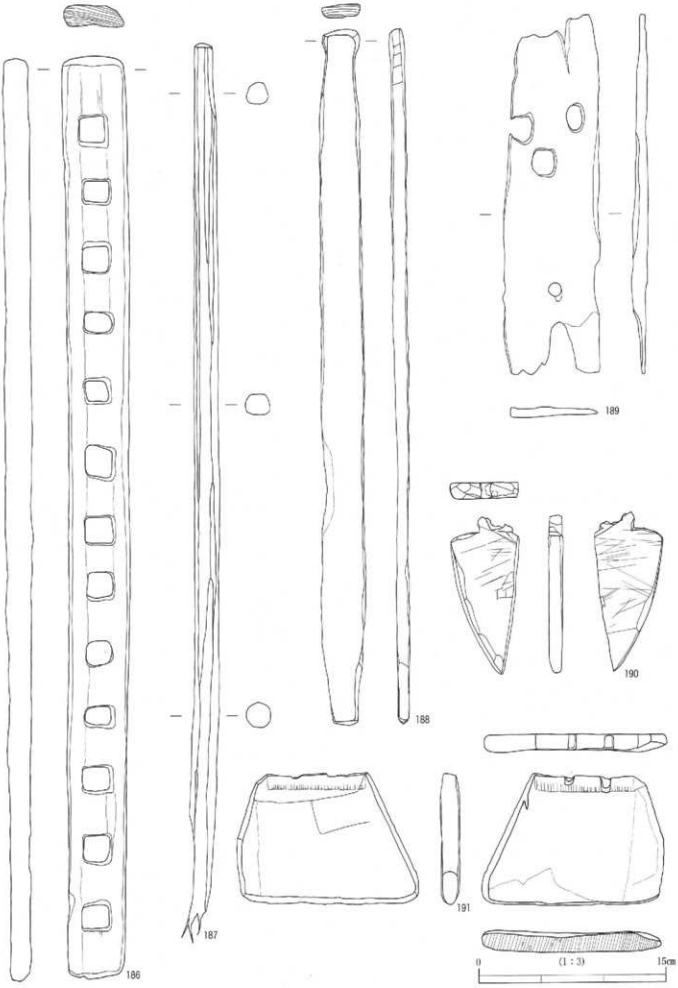

89
91
90
92
93
94
96
95
97
0
(1:3)
15cm

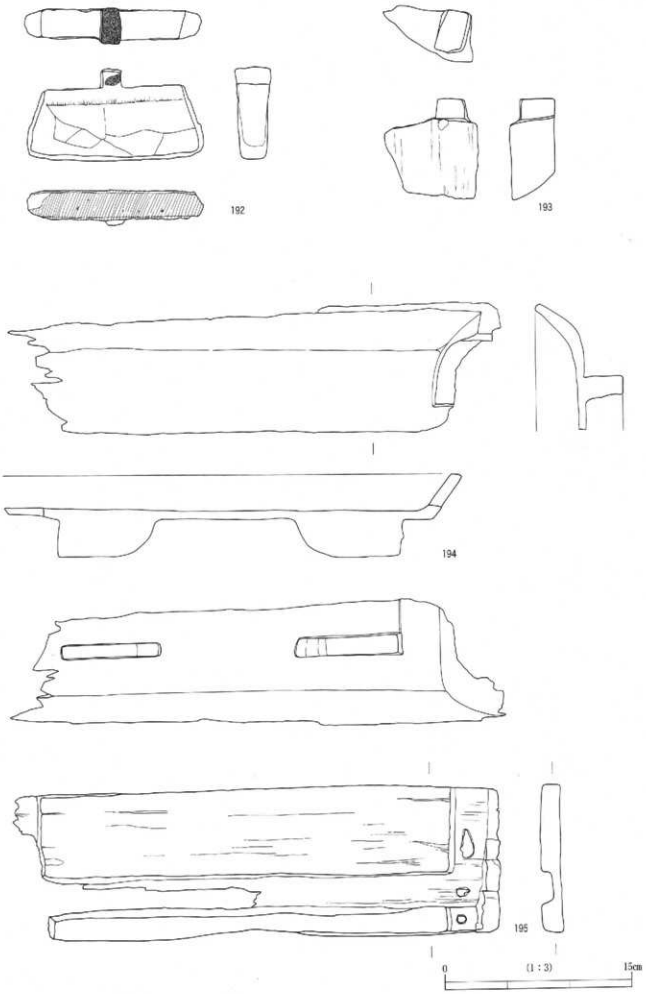

98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
(1：3)
15cm

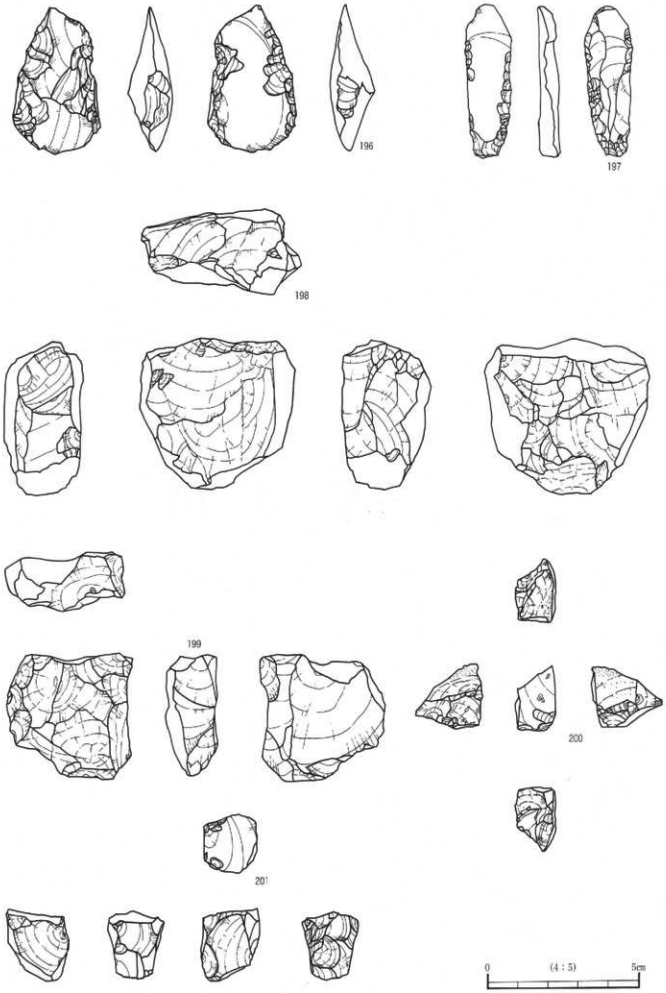
111
112
113
120
114
116
118
121
115
117
119
122
123
128
129
124
130
125
131
126
134
132
127
133
135
0
(1：3)
15cm

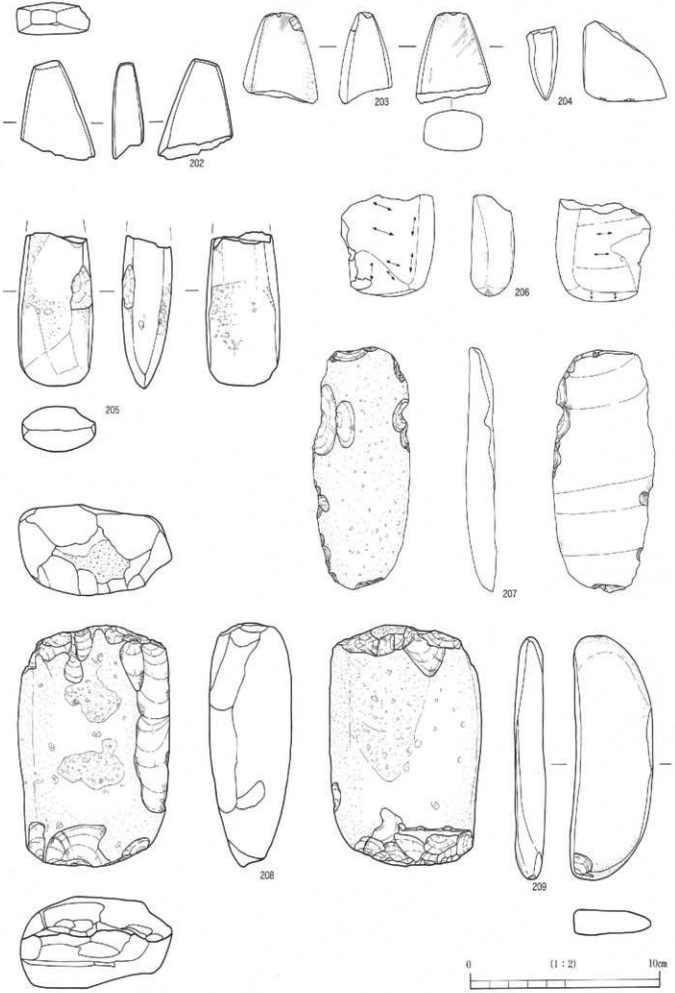

136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
0
(1：3)
15cm

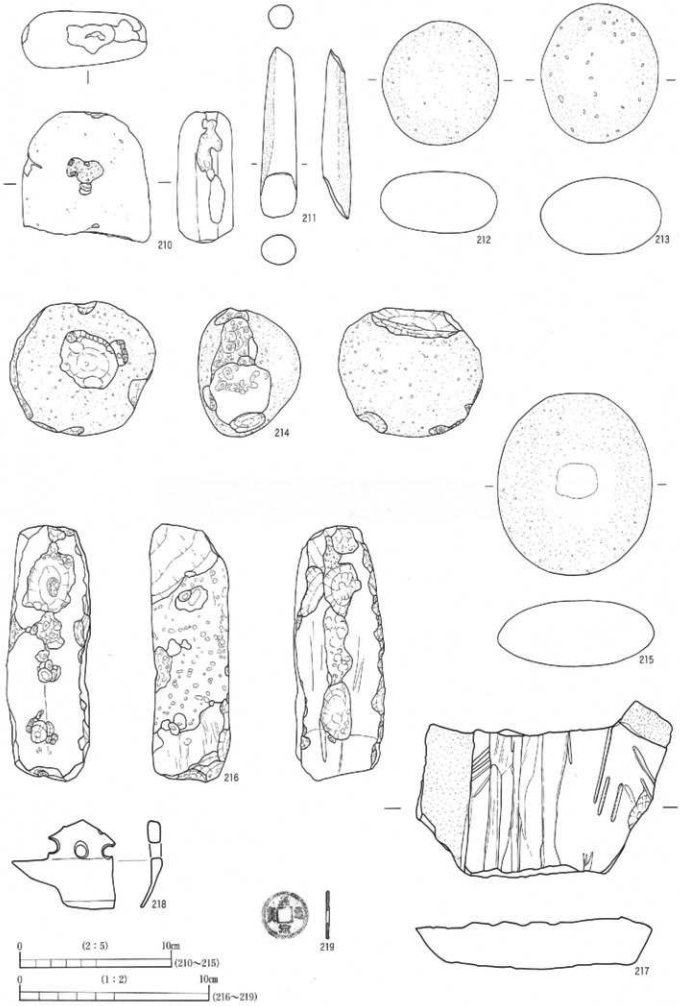

158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
(1：3)
15cm


186
187
188
189
190
191
0
(1：3)
15cm


192
193
194
195
0
(1 : 3)
15cm


196
197
198
199
200
201
0
(4 : 5)
5cm


202
203
204
205
206
207
208
209
0
(1 : 2)
10cm


210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
0 (2:5) 10cm
(210~215)
0 (1:2) 10cm
(216~219)

遺跡周辺の地形（国土地理院　昭和37年撮影）

遺跡の空中写真

遺跡遠景（東から）

発掘状況

上層の土層断面（E1-3付近）

下層の土層断面（C1-6付近）

1号ピット（東から）

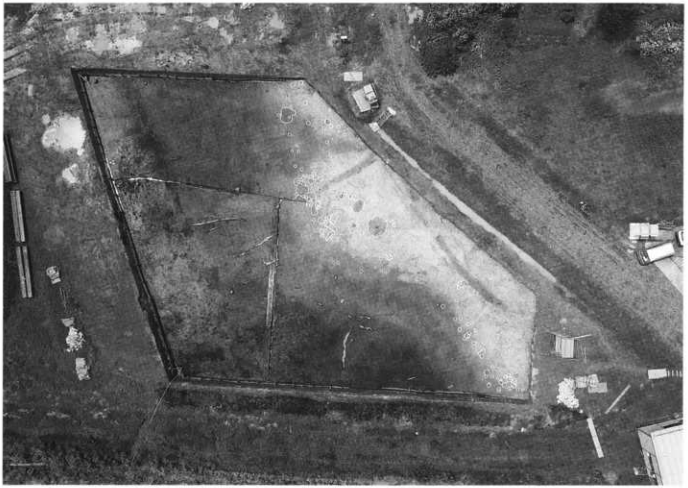
1号ピット遺物出土状況

1号土坑遺物出土状況

2号土坑遺物出土状況

壺（91）出土状況

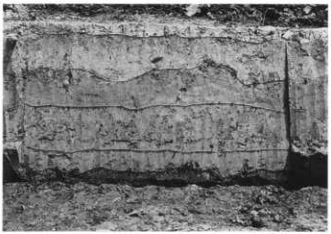
甕（41）出土状況



遺跡全体写真

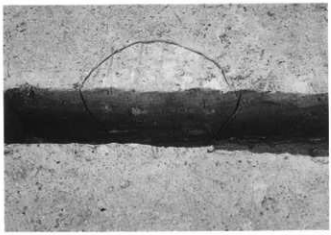
土層断面（地点ａ）

土層断面（地点ｂ）



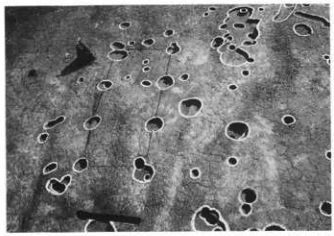
土層断面（地点ｃ）

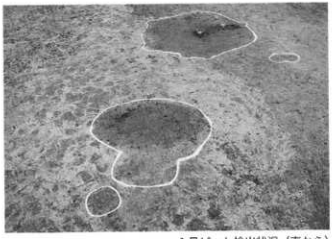
土層断面（地点ｄ）

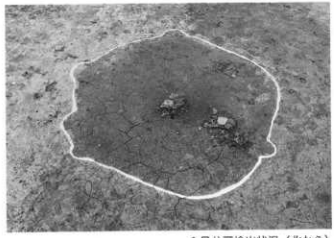

2号掘立柱建物半裁（P-1）

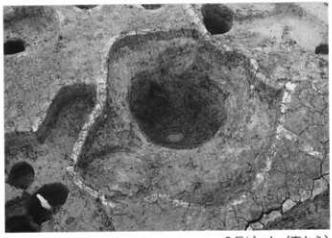
1号・2号掘立柱建物（北東から）

1号掘立柱建物半裁（P-3）


4号掘立柱建物（北から）

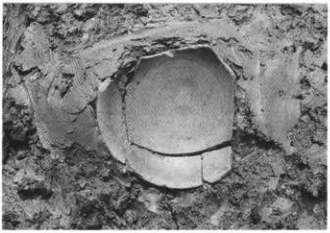

1号ピット検出状況（南から）


1号井戸検出状況（北から）


2号ピット（東から）

1号井戸（北から）

無台坏（158）出土状況



無台坏（177）出土状況

下層の土層断面（C2-3付近）

下層の土層断面（E1-21付近）

1号土坑断面（北から）

1号土坑（東から）

2号土坑断面（西から）

2号土坑（西から）

下駄（192）出土状況

壺（80）出土状況

高杯（135）出土状況

鉢（149）出土状況

甕（41）出土状況

甕（31・36）出土状況

甕（38・52）出土状況

壺（98）出土状況

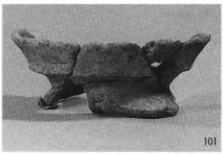
17

41

53

26

42


101

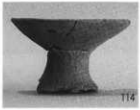
39

27

148

37

38


114

118

89

132

123

90

108

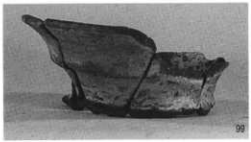
107

122

121

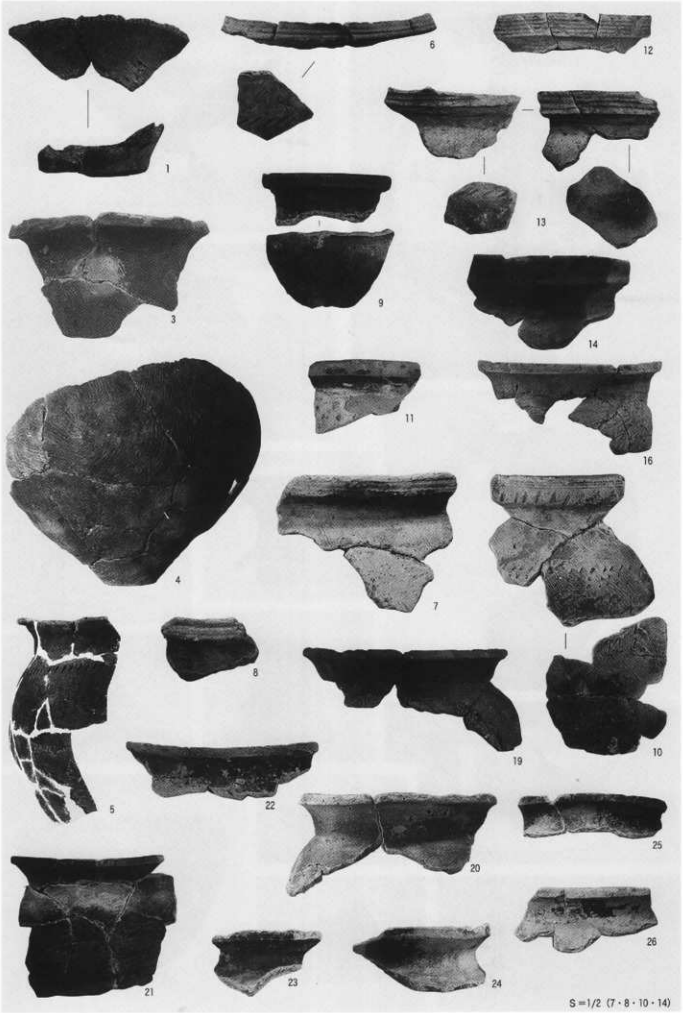
92

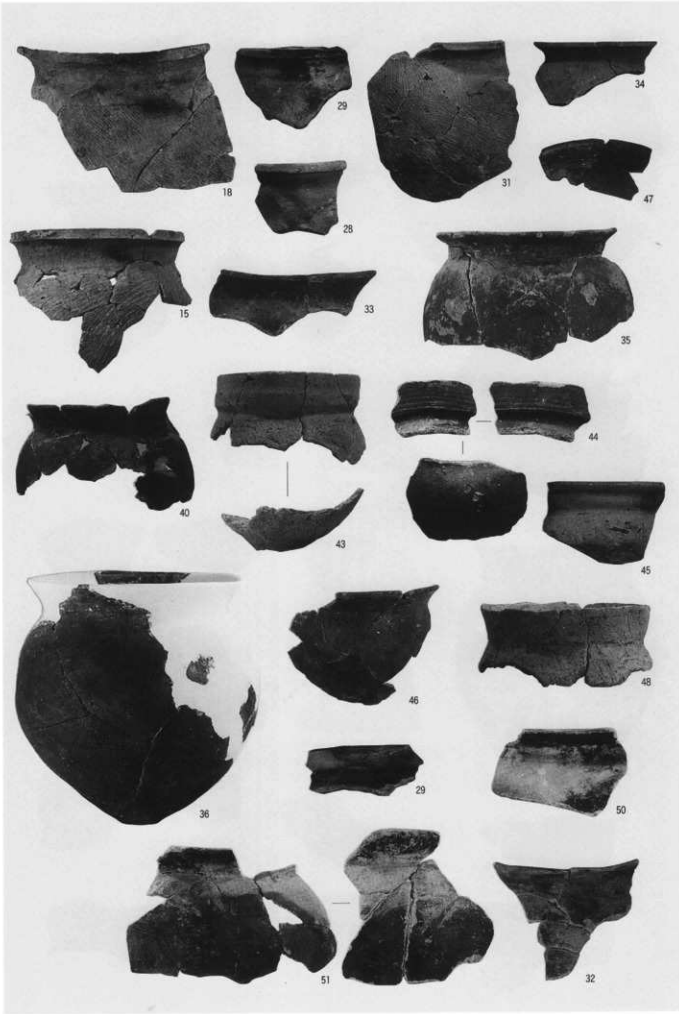
153

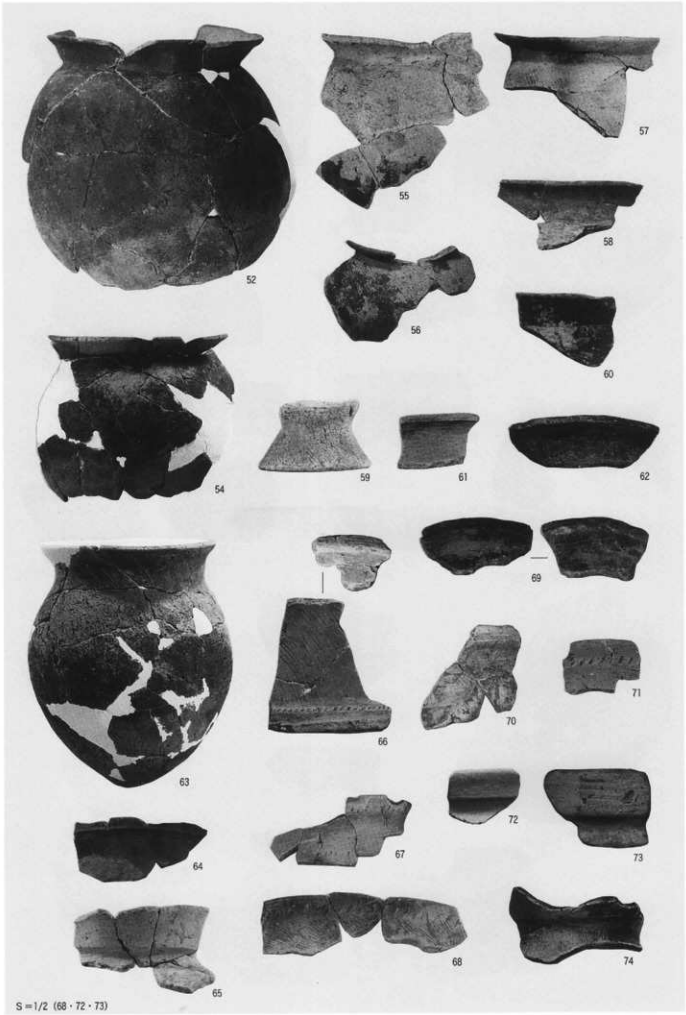

99

120

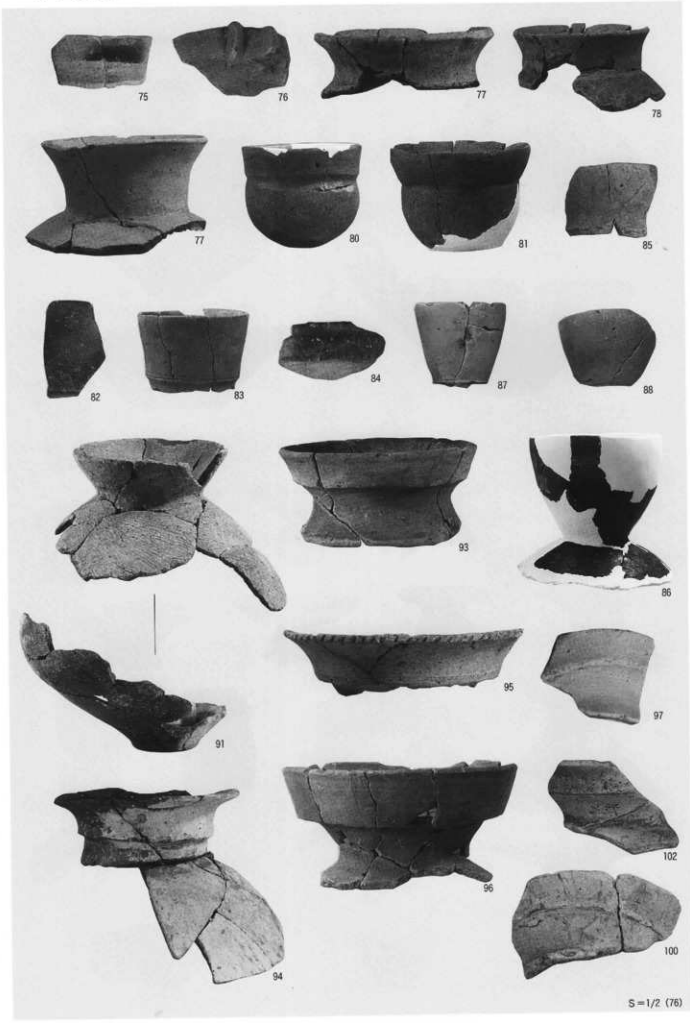
149


1
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
16
19
20
21
22
23
24
25
26
S＝1/2 (7・8・10・14)


18
29
31
34
47
28
15
33
35
40
44
43
45
36
46
48
29
50
51
32



S＝1/2 (68・72・73)



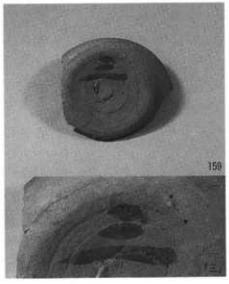
S＝1/2 (76)

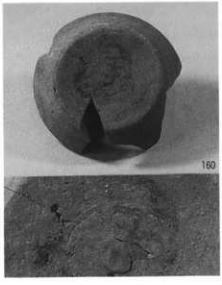
103
98
106
104
119
105
109
110
112
113
116
117
111
115
127
124
126
125
130
129
152
131

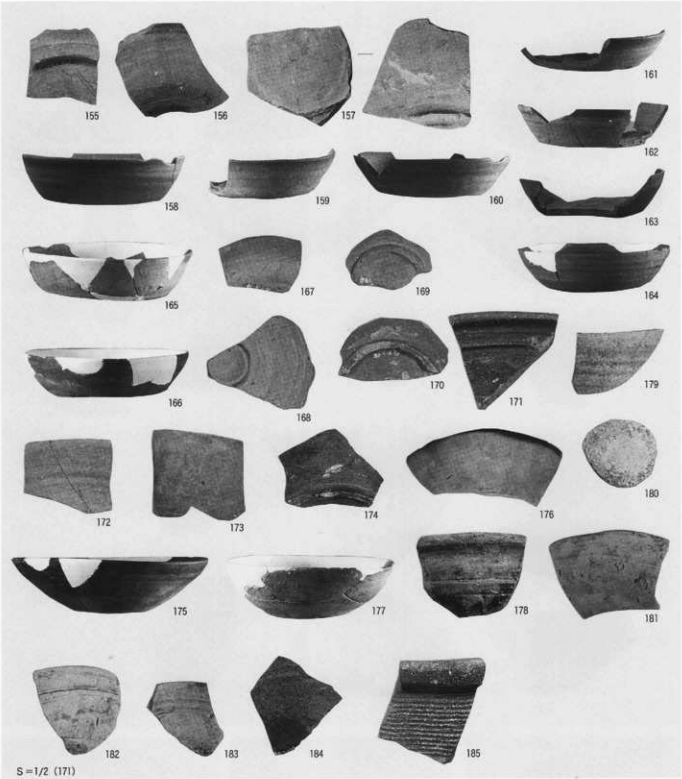
S＝1/2（126）

133
134
135
141
136
138
142
137
139
140
143
145
147
154
144
146
151
150
S＝1/2 (134)

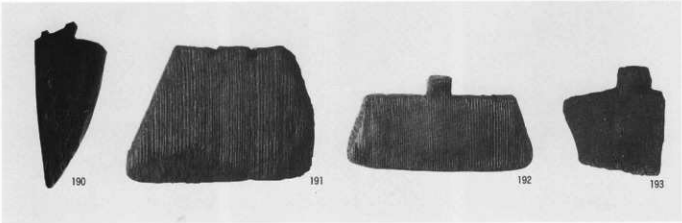
158

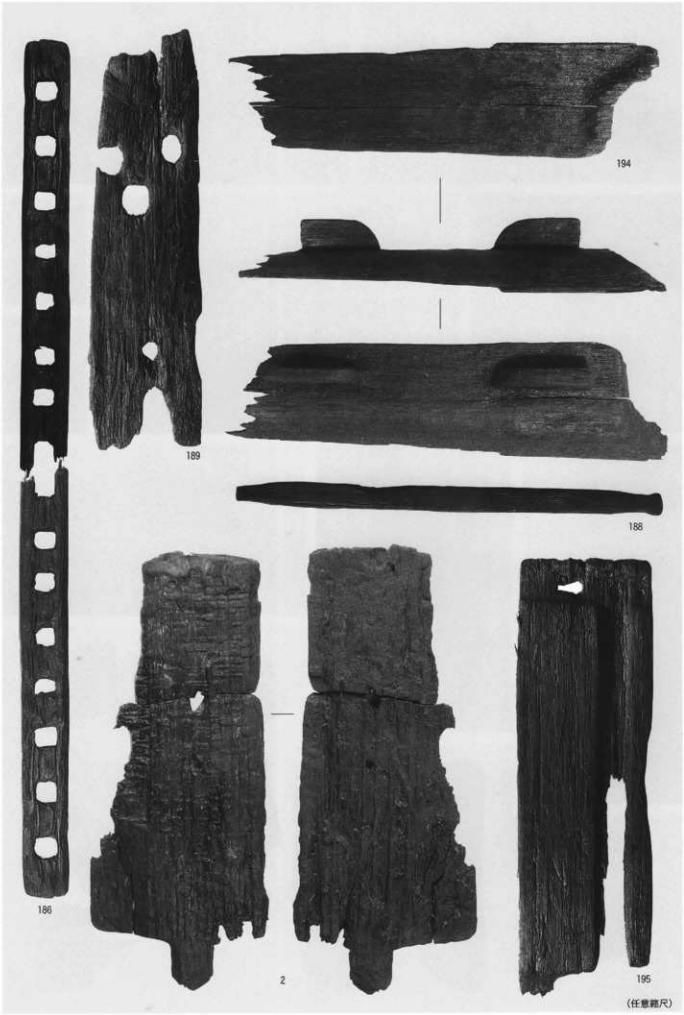

159

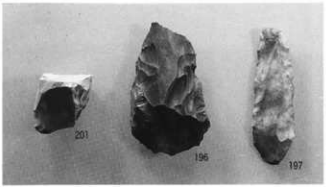

160

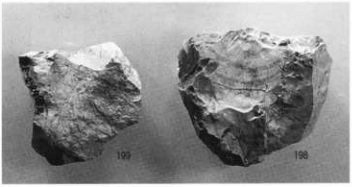

155
156
157
161
162
158
159
160
163
165
167
169
164
166
168
170
171
179
172
173
174
176
180
175
177
178
181
182
183
184
185

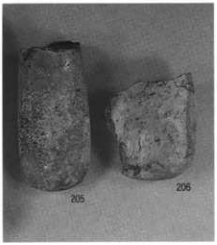
S=1/2 (171)

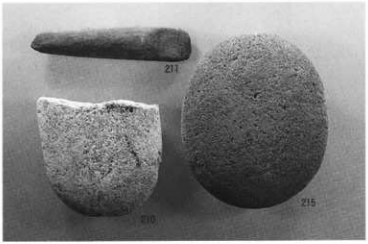

190
191
192
193


194
189
188
186
2
195
(任意縮尺)


201
196
197


199
198


205
206

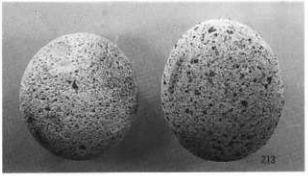

211
210
215

200

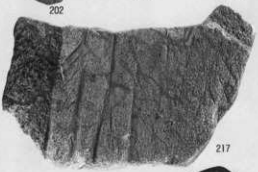
219

216

208


213

202
203
204


217

218

214

209

207

報告書抄録

ふりがな 書名	ならさきいせき 奈良崎遺跡Ⅱ
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	丸山一昭
編集機関	和島村教育委員会
所在地	〒949－4511　新潟県三島郡和島村小島谷3422番地　TEL0258－74－3111
発行年月日	2002年3月11日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奈良崎遺跡	新潟県三島郡和島村大字島崎	1504041	6	37度35分28秒	138度46分25秒	和島村教育委員会	1,000㎡	河川改修

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考
遺物包含地 建物跡	弥生時代～中世	掘立柱建物6棟・井戸1基・土坑2基・ピット多数	弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器中世土師器・石器・石製品木製品・金属製品	

和島村埋蔵文化財調査報告書第11集
二級河川郷本川広域基幹河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

奈良崎遺跡Ⅱ

平成14年3月6日印刷　編集・刊行　新潟県和島村教育委員会
平成14年3月11日発行　〒949-4511　和島村大字小島谷3422番地
電話　0258－74－3111㈹
FAX　0258－74－3500
印刷・製本　㈱第一印刷所
新潟市和合町2丁目4番18号
電話　025－285－7161